

平成28年4月号～平成29年3月号掲載分

## 避難指示解除へ 向けて

様々な取組みを着実に  
進めるとともに、  
ふるさとへの想いを  
一つに

### この時期の復興に向けた主な動き

- H28. 5月 浪江町交流館（福島・郡山・いわき）に  
コミュニティ支援員を配置
- 6月 住民懇談会開催（全8会場）（～7月）
- 6月 町内の除染効果について検証を開始  
（除染検証委員会開催）
- 9月 特例宿泊を開始  
（帰還支援一時宿泊所開所）
- 9月 平成28年度浪江町住民意向調査を実施
- 9月 中心市街地再生に向けた検討を開始  
（中心市街地再生計画検討委員会開催）
- 10月 浪江町町立小・中学校に係る検討委員会  
開催
- 11月 浪江町復興計画【第二次】中間とりまとめ
- 12月 除染検証委員会が検証結果報告書を提出
- H29. 1月 避難指示解除に関する有識者検証委員会  
フォローアップ会合が報告書を提出
- 1月 住民懇談会開催（全10会場）（～2月）
- 3月 浪江町地域防災計画を改定
- 3月 浪江町復興計画【第二次】を策定
- 3月 浪江町中心市街地再生計画を策定
- 3月 帰還困難区域を除き避難指示が解除



請戸漁港が再開（2月25日）



まち・なみ・まるしえ（浪江町仮設商業共同店舗施設）が  
オープン（10月27日）



東日本大震災慰霊碑を建立（3月11日）



浪江診療所（3月27日）・仮設津島診療所（3月23日）が開所





# 遠藤 一衛さん・益世さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島・遠藤  
取材日：2月23日 「平成28年4月 広報なみえ掲載」

## 前を向いて進まなくちゃ



▲名取市美田園のお宅にて、遠藤一衛さん・益世さんご夫妻。

震災前、定年後の生活を悠々自適に楽しんでいた遠藤さんご夫妻。郡山市で約2年半避難生活を送った後、現在は娘さんと一緒に宮城県名取市美田園で暮らしています。

ご主人の一衛さんは「浪江に帰りたけれど、医療や商業施設が整わないと生活が成り立たない」と強調されていました。

### ◆地域の活動に積極的に参加

美田園に来たばかりの頃は地理も分からないから不安と言えば不安だね。でも家の中に閉じこもっているわけにはいかなかった。地域サークルなどにもなるべく積極的に参加しています。

私（一衛さん）はプールと体育館のジムに通っているんです。ジムの方は、本当は名取市の人しか利用できないんだけど、プールで知り合った地元の方の紹介で、避難中ってことで特別に許可をもらって。それと、この間は「男の料理教室」にも参加しました。

私（益世さん）は、郡山ではフラダンスの教室に。ここに来てからは公民館で「どんなサークルがあるか教えてください」と尋ねまして、今は編み物とパッチワーク教室に参加しています。それからコーラスのサークルにも。今日も午前中はコー

ラスの練習があったんですが、ラジオ体操や発声練習など基礎から教えてくれるんですよ。

この辺には閑上など宮城県内で津波に遭って避難して来た方も多いいので、被災した同士がお茶のみしながら気軽に話せる場も多いんです。一つに参加すると「こういうのもあるよ」と別の催しに誘われたりして、少しずつ知り合いが増えました。

### ◆浪江の思い出、家のこと

私（一衛さん）は釣りが好きで、よく高瀬川、室原川の溪流へアユやハゼ釣りに行きました。釣り仲間だった友人は娘さんと一緒に沖繩に移住しましたが、今も月2回ほど電話をくれます。向こうでは海釣りはできないけれど川釣りはできない、気兼ねなく話す相手もないって。

浪江の家には月1回くらい帰ります。建物はそのまま残っているんですが、かび臭いし家中は空っぽだから2、3時間しかいられない。それに一時帰宅しても、近所の人と顔を合わせる機会があまりないのが寂しいです。早く浪江に帰りたと思う反面、帰るとなると一からのやり直しになる。実際には難し

いかなと、半分半分に気持ちが揺れています。

### ◆まちの将来に向けて

浪江の状況を知りたいので、新聞は「福島民友」。町の人が集まる茶話会にも毎回顔を出して情報交換しています。皆さん心配しているのは医療と買い物のこと。家内は車の運転ができないので、町の商店が再開しないと、帰還しても生活が成り立たないと。常磐線が復旧し、病院や商店ができて初めて「帰ろう」という動きも活発になるんじゃないでしょうか。

浪江の広報には生活に直結した情報をもっと載せていただきたい。また避難先の復興住宅に入居しようか迷っている人もいるので、二重三重の引っ越しにならないよう、町の方針をはっきり示していただけたらと。

離れてみるとふるさとの良さがよく分かり、町の人と話すことがホッとします。この先、どこに住むことになっても浪江の思い出や人との絆を大切にしつつ、前を向いて進まなくちゃと思っています。



## 天野 淑子さん(小野田)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原  
取材日：3月3日 「平成28年4月 広報なみえ掲載」

### 出会った方との絆をこれからも大切にしたい

二本松の仮設住宅で避難生活を送る天野さんは、明るくはつらつとした自治会長さんです。県外に避難されていた時は、強いストレスから引きこもりになってしまったそうですが、心機一転、現在は気の合うご友人たちと洋裁などを楽しみ、震災後に築いた新しい絆を大切にしたいとおっしゃいます。



たんですが、11月に準備が整いやつと引越すことができました。仮設は同じ浪江の人でも知らない人ばかりで、イベントがあっても半年は家から出られなくて、長男のいるいわきに泊まりに行ったり、部屋で小物づくりをして過ごしました。そんな生活に転機が訪れたのは、またしても伯父からの話でした。自治会で婦人部を立ち上げるから部長をやれと。今の状態でなん

抜け、肌も荒れ、全身のかゆみで眠れない夜が続きました。これでは生活ができません、ダメになると思っていたところに、二本松市の旧平石小仮設に入居した伯父から私の分も申し込んだから8月にここにおいでと連絡が入りました。なかなか荷物をまとめられず、ポーツとしていたんですが、11月に準備が整いやつと引越すことができました。仮設は同じ浪江の人でも知らない人ばかりで、イベントがあっても半年は家から出られなくて、長男のいるいわきに泊まりに行ったり、部屋で小物づくりをして過ごしました。そんな生活に転機が訪れたのは、またしても伯父からの話でした。自治会で婦人部を立ち上げるから部長をやれと。今の状態でなん

浪江では、救護施設福島県浪江ひまわり荘で厨房の仕事をしています。会社の友人が誘ってくれた群馬へと避難し、福島で仕事をしている息子たちと離れて初めての団地での一人暮らしとなりました。

は、班長、役員とは関係なくみんな自分から声を掛けていろいろやってくれます。自分だけやるのではなく、一人ひとりが役割を持って協力してくれるので助かっています。

で私が…と思い、嫌だと言ったんですが、大堀地区の婦人会長や婦人消防隊長をやっていたかたのなか。12年4月に婦人部長を任せられ、初めてみんなの顔を覚えて、こんなイベントをやっていたんだ、こんな支援を受けていたんだと知りました。私も何かできるのであればと思つて、月に1回着物のリメイク、洋裁を始めました。そのおかげで、気心が知れた友人ができました。作品を交流の場で飾っていたら、支援してくれる方々がバザーなど催し物で売ってくれたり、古着をくださるようになりました。震災がなければずつと仕事をしていたので、大変なことは多かったです。全国的にこんなすごい繋がりができたのは良かったことですね。1年後には自治会長となり、まもなく3年が経ちます。ここでは、班長、役員とは関係なくみんな自分から声を掛けていろいろやってくれます。自分だけやるのではなく、一人ひとりが役割を持って協力してくれるので助かっています。

夏からいわきの復興公営住宅に住むことになりました。洋裁を通して絆が深まった友人とは、これから先バラバラに住むようになっていっても岳温泉に泊まりに行こうと話しています。ここでも出会った方々との縁をこれからも大切にしていきたいと思つています。



◆町民の皆さんへのメッセージ  
浪江町民として繋がりを持っていた方がいいと思つています。どこにいても忘れないように、隣組は絶対なくしてはいけません。バラバラに避難してしまいますが、年に1回泊りがけで会つていきます。みんな楽しみでいつも全員参加です。他の地区でもあればいいのと思つています。

して建てた家は、子どもが生まれて育った愛着のある家。帰らないと思つても解体にはまだ踏み出せません。

▲笑顔の素敵な天野さん。洋裁の作品と一緒に。



福島県

## 小野田 浩宗さん(小野田) 「平成28年4月 広報なみえ掲載」

平成23年7月号第1回目のころ通信で、ヤングプラザスポーツ少年団団長として、熱い思いを語ってくれた小野田さんから、近況をお知らせいただきました。

### 病気の経験と写真業が これからの道に続いていきます



現在、チームは休団中ですが、生業の写真業と並行して健康と食の大切さを伝えていこうと新たな資格も取り、熱い気持ちで頑張っています。

#### ◆震災後の経験

悪夢のような震災と原発事故は、私からも多くのものを奪いました。長年の実績あった仕事、地域の友人・知人との関わり…。

幸いな事に家族が無事で、避難生活にも取りあえずの方向性が見え、ふっと我に返った震災5か月後、大きな喪失感と今後の生活への不安にさいなまれ、極度のストレスで胸が絞め付けられる思いがしました。物事を悪い方向ばかりに思考してしまい、一時期は気力も体力も無くなったうつ病の発症でした。3つめの臨時職が忙しくなった初冬頃、そのうつ病は良くなったのですが、入れ替わるように発症したのが、急性とは言え「即入院治療が必要」と医師に告げられた糖尿病でした。結局は食事療法と多くの

方々のアドバイスを取り入れ、入院せずに改善を図り、奇跡的に1か月程で改善の兆しが見え始めた頃、心筋梗塞を発症したので。一時は生死もさまよいましたが、手術と2週間の入院で退院でき、現在は元気にしています。あの時の3つの病気の

の経験は、病気や健康ということに無頓着だった私の考えを改めさせるきっかけとなりました。

#### ◆仕事について

現在、28年間続けた花卉栽培や稲作の仕事には従事できなくなりました。結婚後から本格的に関わった写真業については、社長夫妻が横浜で避難生活を送っていることもあり、浪江店・富岡店共、店舗の再開は難しいと思われま。しかし、その一部だった卒業アルバム制作業務の部分は、震災次年度の混乱の最中であっても継続依頼してくださった学校もあり、数校ながら、妻と協力して今も続けています。また、町成人式集合写真撮影の仕事も受注させていた。なつかしい町民の方々と再会の機会としてもありがたく感謝しながら仕事をしていきます。更に最近、昔の写真の修正や引き伸ばしの依頼、震災前に当スタジオで撮影した写真の再作成等の依頼があり、写真に関しての要望について自分達で出来る限りの対応をしていきたいと考えています。震災後5年の今だからこそ、大切な仕事ではないかと実感しています。それから、自分自身が50の坂を越えて、アルバム調の自分誌や家族誌等を作りたくなってきました。良いものができたら御希望の方々にすすめてできれば：

とも思っています。今後、店舗展開はできなくても皆さんに喜んでいただける卒業アルバム制作や写真作りをしていこうと妻と話しています。

#### ◆これからのこと

写真業と並行して、震災後の3つの病気の経験から食と健康について考えるようになり、食育指導士と健康管理士の資格を取得しました。まだまだ未熟な知識ではありますが、浪江町出身の方々を中心に新たに出会った方にも輪を広げながら「メンズキッチン」のグループを立ち上げ、活動をしています。自分の病気の経験と健康や食の知識が少しでも皆さんのお役に立てれば幸いに思っています。

多くのものを奪った震災でしたが、5年を経て、震災による新たな生活環境や生き方が多くの人との出会いを生み出してくれたことに気付きました。

我が家的にも、娘達はこの春に大学4年、社会人2年目、中学3年と成長し、震災後、世帯別に暮らしていた小野田の両親とは数ヶ月後にまた一緒に暮らすこととなりました。

震災前とまるつきり同じ生活や仕事の形はできなくても、あの頃に築いていたものをベースに新しい出会いも大切にしながら、前進していきたいと思っています。



# 長橋 明孝さん(大堀)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 銅嶋  
取材日：4月8日 「平成28年5月 広報なみえ掲載」

## 大堀相馬焼への思いを胸に



大堀相馬焼の窯元「明月窯」を先代から引き継ぎ45年。伝統工芸士として、また大堀相馬焼協同組合の元会長として、大堀相馬焼を先導する役割を果たしていた長橋さん。現在は、東京都東雲の公務員住宅に避難し、奥さまと二人で暮らしています。腰を痛めていることもあり、窯元再建の道は見えていませんが、文化センター等が主催する陶芸教室の講師として活躍されています。

### ◆うれしい支援

震災後、津島に一時避難した後、新潟県栃尾市の『大堀会』から声をかけてもらい、妻と長男と一緒に、車2台で栃尾市を目指しました。車のガソリンが切れ、途中のインターまで届けてもらったり、本当にたいへんな道中でした。栃尾市では、布団や衣類、生活用品などたくさん寄付してもらいました。着の身着のまま避難したので、本当にありがたかったです。その後、東京に住む次男から、自分が住むつもりで購入していたマンションに住まないか、との誘いを受け、半年ほどそこにい



ました。しかし、あまり長くなってもと思い、知人が提供してくれた埼玉のマンションに移りました。気兼ねなく住める場所でしたが、幹線道路沿いで騒音がひどく困っていた時に、今住んでいる公務員住宅の情報を得て移ってきました。もう4年になりますね。長男は今も埼玉のマンションで暮らしています。

### ◆ひな人形や干支飾り

震災前は、「明月窯」の窯元として職人一人とパートの人を雇い、妻や長男と一緒に毎日忙しく働いていました。湯飲み茶碗や皿とあわせて、ひな人形や干支飾りの製作が盛んになり、人気を得ていました。干支飾りは郵便局の保険加入の景品に採用となり、干支飾りを揃えるために保険に加入したという人もいたようです。伝統を大事にしながら、新しい取組みもしていましたね。長男が跡を継いでくれて営業にも力を入れていた時だったので、震災がなかったらという悔しい思いはあります。

### ◆陶芸教室の講師として

この頃、江東区の文化センター等で開催される「陶芸教

室」の講師として、出かけることが増えてきました。昨年から始まった「はじめての陶芸教室」は、3回の連続講座で、てびねりから絵付けまで行います。同じ施設内に電気窯もあるので便利です。人気の講座で、定員の20名はすぐに満員になってしまいます。土は、名古屋の業者に頼んで取り寄せています。大堀の土と同じ組成で、工法を守ればちゃんとした「大堀相馬焼」になります。

窯元として事業再開したいのは山々ですが、腰を痛めていることもあり、今年77歳になる私にとつて、一から事業を始めるのはちょっとしんどいです。長男の思い次第になると考えています。

今後のことは、はつきり決められない状況です。妻と二人、趣味のそば打ちや陶芸教室の講師役を楽しみに過ごしていきたいと思いますが、一方で浪江に帰れるようになったら、事業を再開したいという思いも変わらざります。浪江の暮らしに代わるものはありません。



福島県

## 仲谷 貴美子さん(井手)

取材者：浪江町役場 佐々木・鳴原  
取材日：4月18日 「平成28年6月 広報なみえ掲載」

### もらった命なんだから先のことだけ 考えていこう

仲谷さんは、二本松市でお母さんと娘さんとの3人暮らしをしています。楽しみは、震災前から習っていた三味線。猪苗代の先生と一緒に月に1回、老人ホームへ三味線と民謡の慰問を行っています。いろいろあったことを考えていてもしょうがないと、先だけを見ていく生き方にはパワーがあり、周りを元気にする力を持っている太陽のような明るい人です。



▲笑顔が魅力の仲谷さん

震災は、施設で夜ご飯を作り始めた時に起きました。とたんに電気が消え、ガス、水道とライフラインは全部だめになり、ひどい揺れのため外に出る、という指示で仕事の半袖のまま外に出ました。余震が怖くて中に入れず、2時間みんなで体を寄せ合い震えていました。ずっとそのままでもできないので、中に入って非常用の水と食料で夕飯を作り、翌朝のおにぎりを用意しました。その時は、明日になれば何とかなるだろうと樂觀していました。情報が一切なかったから何もわからなかったのです。

電話も通じず家族の安否がわからないままだったので取りあえず家に帰ることになりました。浪江では、家で食べる分の野菜を母が育て、私は大熊町の老人介護施設で調理師をしていました。家の裏山は山菜やキノコなどが豊富で宝の山でした。空気がきれい、四季折々の自然があつて浪江はいとこころばかりでした。

外に出てみて初めて周りの状況がわかり愕然としました。自宅は築100年以上。家族の無事だけを祈り、普段15分の道のりを5時間かけてたどり着いたのは夜11時でした。家は大きく崩れましたが幸い母は無事で、それからアクセスホームさくらに通所していた娘を迎えに行き、夜は隣の家でお世話になりました。その後、大堀の家から津島の避難所を経て、緊迫した状況の中、東和町の体育館へ。食べ物もなくもらった毛布で寒さをしのぎましたが、東和町婦人会の方たちが炊き出しをしてくれて本当にありがたかったです。

避難所では80人程の避難者の中からリーダーを決めて、その方が物資や食品をしっかりと分配してくれるなど素晴らしいまじめ役をしてくれたおかげで、約1か月間協力しあつて穏やかに過ごすことができました。二次避難先の猪苗代でもオナー夫妻がとても良くしてください、自分ができることを手伝いながら4か月過ごしました。8月に平石仮設へ入居し、ここでも自治会長のリリーダースィップのおかげで穏やかに過ごすことができました。

ただ、心配だったのは母のこと。浪江にいた時は民謡大会に出たり、話すのが好きで毎日バイクで近所に遊びに行っていた元気な母が、震災後は先々の不安を抱えて自ら楽しもうという意欲がなくなり、介護認定を受けるようになってしまいました。それで、今の状態を保ちつつまでも元気でいてほしいという願いから家を建てることを決意し、昨年5月に二本松市に家を構えました。娘が通所しているアクセスホームさくらに歩いていける距離だったことも決め手になりました。



## 小野田 順さん(大堀)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：5月11日 「平成28年6月 広報なみえ掲載」

### 浪江の方とおしゃべりするのが なによりの楽しみです



▲美里町のご自宅の庭で草花を丹精する  
小野田順さん

大堀地区の民生委員で、大堀老人会（清流会）の女性部長も務めていた小野田順さん。長男のお嫁さんの実家がある宮城県美里町に家を建て、ご主人・息子さん夫婦・3人のお孫さんとともに家族7人で暮らしておられます。避難中は腰の痛みにも悩まされましたが、手術を受けて全快。浪江の方とも地元の方とも積極的に交流し、活動的に過ごしています。

#### ◆現在の自宅に落ち着くまで

民生委員の役をおおせつかつていたので、地震が起きた当日は揺れが収まってから独り暮らしの方のお宅を回り、安否確認に務めました。うちは地盤が固いので家そのものの被害は少なく、避難を呼びかける放送も聞こえなかった。家族7人で避難したのは12日の午後3時頃でした。

◆民生委員として活動を続ける  
避難中の無理もたたつてか高齢の母は亡くなり、主人も一時は塞ぎこむようになるなど、原発事故で想像もできなかったような辛い経験をしました。でも、私らより大変な思いをされた方も多いと思います。

◆浪江の人と集う幸福な時間  
美里町に避難した人はほとんどいないので、浪江の人が集まる

◆大堀に1泊でも泊まりたい  
大堀には月1回くらい一時帰宅し、家の周りの草刈りをしてきます。自分たちの住んでいた家は帰宅困難地域とはいえないところ震災前とそう変わらない状態に見えますが、5年も住んでいないと行くたびに傷みが進んでいます。周りは草木が生い茂って家に入るまでが大変です。

◆浪江の人と集う幸福な時間  
美里町に避難した人はほとんどいないので、浪江の人が集まる

催しには車や電車を使って参加しています。大堀の清流会では年2回、春・秋に旅行を企画していて、今年の春も中ノ沢温泉に旅行に出かけました。

◆大堀に1泊でも泊まりたい  
大堀には月1回くらい一時帰宅し、家の周りの草刈りをしてきます。自分たちの住んでいた家は帰宅困難地域とはいえないところ震災前とそう変わらない状態に見えますが、5年も住んでいないと行くたびに傷みが進んでいます。周りは草木が生い茂って家に入るまでが大変です。

◆浪江の人と集う幸福な時間  
美里町に避難した人はほとんどいないので、浪江の人が集まる



茨城県

## 木幡 サチ子さん(立野)

取材者：NPO法人茨城NPOセンター・ commons 横田  
浪江町復興支援員茨城県駐在 田中・森  
取材日：4月27日 「平成28年6月 広報なみえ掲載」

## つくばでもお店やお話会を始めました

木幡さんは、原発災害により、茨城、千葉を経て1年前につくば市に移住。再開したエステサロンを営むかたわら、近隣の避難者の皆さんが集える機会も提供しています。



▲自宅に併設されたエステサロンの入り口を背にした木幡さん

◆2回目の再出発  
平成25年4月の「広報なみえ」で紹介された時は、千葉県東金市の借上げ住宅に避難していました。そこでエステサロンを再開したり、避難先の市役所や浪江町復興支援員にもご協力をお願いして、千葉に避難している近所の方々と交流会や旅行をしたり、千葉県内で開かれる福島の方の集まりに参加するなどしていました。当時夫は福島で仕事をし、息子も県外、母は妹の家のある茨城県つくば市に

いて、自分は娘と暮らしていました。

ところが千葉に来て4年目に、借り上げしていた住宅を購入するか出るかの選択を迫られました。娘が千葉の短大に通う必要があること、自分もエステの仕事は続けたいこと、福島の家も管理する必要があること、などいろいろ考え、母が暮らしていたつくばに移る決意をし、店舗も兼ねた家を新築することにしました。ここに住みもう直ぐ1年になります。

夫も退職して福島からつくばにきて、バラバラに暮らしていた家族が共に暮らせるようになりました。母は野菜作り、夫は造園の仕事とサッカーで汗を流し、震災の日に中学校を卒業した次女は短大を卒業して、人の役に立ちたいと障害者支援施設で働いています。そして自分は、浪江、東金に続き3回目の開業となるエステサロンをつくば市高崎に開いています。

◆つながりを作り、人を元気に  
つくばにはまだ知人が少ないものの、着付け教室に参加した

りしながら新たなつながりを作るようにしています。また、千葉でもしてきたように、福島から来られている方で近くにいる方同士で茶話会をしたいと思いい、今度は茨城の復興支援員の方にもご協力いただきながら茶話会を開催しています。新聞折り込みの情報紙に大きく取り上げてもらい、徐々につくばの方とのつながりが増えてきました。

前回(平成25年4月)の「こころ通信」同様、私は人を元気にすることが大好きです。エステの仕事も、人に喜ばれ、人とのつながりを作れる仕事なので、この地を使命の地と決め始めました。浪江の家や田畑のことも気になりますし、ここはいつも福島にあります。最後は浪江に帰りたいですが、今はこの茨城で友達を増やしながら暮らしていきたいと思っっています。そして今後も福島や浪江町とのつながりやを大事にしていきたいです。





# 古農 修一郎さん(酒井)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：5月6日 「平成28年7月 広報なみえ掲載」

## 「役に立ちたい」—— その思いを実現するために、僕は歩みを進める

看護大学を卒業し、今年4月から社会人としての第一歩を踏み出した古農さん。秋田市に住む両親と離れ、福島市での一人暮らしが始まりました。

「大震災の時には怪我をした人や困っている人の役には立てなかったけれど、今の僕なら何かできる。そしてこれからは、もっと」とおっしゃる古農さんの強い思いに、この大きな災害を乗り越え、立ち向かおうとする若者の気概を感じます。



▲ご自宅にて。優しい笑顔がととても素敵でした

◆浪江町から福島市へ。さらに北に向かつて避難しました。あの日、双葉高校は春休みで、午前中から部活でした。小学校3年生から始めた剣道を続け、高校でも剣道部でした。地震が起きて双葉中学校に避難。母から何度も留守電が入り、互いの無事を知りました。夜になって父が迎えに来てくれ、近所の後輩も一緒に戻りました。家は瓦が大きく崩れ、大堀の親戚を頼りました。原発事故を知った父は、祖父母たちも連れて飯坂町の知人宅へ向かいましたが、途中、物々しい自衛隊車両や白い防護服を着た人たちとすれ違い、大変なことが起きると察しました。

父は、子どもたちのためにできるだけ遠くに逃げることを考えていたようで、その4日後に秋田市へ。北海道まで行くことも考えていたようですが、東京に向かう母方の祖父母や家に研修に来ていた学生たちと別れ、父方の祖母と両親、家族みんなで秋田に住むことになりました。祖母は今、福島市で一人暮らしですが、父も僕も時折、様子を見に行っています。

◆双葉や秋田の仲間や恩師とは、「今でも親密に関わり合いたい」避難先への転校についてはかなり迷いました。双葉高校の同級生たちは県内のサテライト校に進学。剣道部は東北大会出場を目指して掲げているものの、出場人数がギリギリで、一人でも抜けたらそれが叶わない状況でした。今でも申し訳ない気持ちで一杯です。だから、秋田中央高校に通うことになった時に剣道は辞めようとしたのですが、同級生のお父さんに部活見学を勧められて入部し、秋田県大会に出場しました。

友人や恩師にはとても恵まれたと思います。双葉や秋田の学校や剣道部の仲間、後輩とのつながりは強く感じていて、「生きてさえいれば、きつと会える」と固く信じています。

◆いろんなことを経験したからなのか、アツという間の大学生活でした

日本赤十字秋田看護大学に進み、4月から福島赤十字病院に勤めています。小学生の頃に、父方の祖父のお見舞いで見かけた看護師さんにぼんやりとした憧れを抱きました。東日本震災の時、養護の先生が怪我人の手当をしているのを見て、その時は力仕事しかできなかった僕は無力感を感じました。資格を持つてば、もっと寄り添えることができるんじゃないか。それが大学と職業を選んだ理由です。

学生の時には、日赤キッズクロスプロジェクト(被災3県の子どもたちの保養プログラム)や被災体験を活かした防災キャンプ、防災グッズの紹介活動、災害看護学会に関わる教授のお手伝いなど幅広く関わったり、大好きな自転車でも秋田県内や隣県を訪ねたりした4年間でした。

これからは、役に立つための「技術を身に付ける修行期間」だと思っています。



## 三瓶 一樹さん(酒田)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：5月15日 「平成28年7月 広報なみえ掲載」

### 応援を力に… 浪江町出身のプロボクサーとして

高校時代からプロボクサーを夢見ていた三瓶さんは、東京都品川区五反田にあるワタナベボクシングジムに所属し、プロボクサーとして日々、厳しい練習を重ねています。

力になるのは、家族や友人、同じ福島県出身の人たちの応援だと言います。



▲ボクシングジムでの三瓶さん



◀「福島」とプリントした試合用のトランクス

◆**プロボクサーへの憧れと震災**  
ボクシングを始めたのは高校生の時です。ボクサーを見て「格好いいなあ！」と憧れました。授業が終わると電車で1時間かけて、いわき市のボクシングジムに通いました。高校卒業後いったんは埼玉県の会社に就職したのですが、ボクサーへの夢が諦められず浪江に戻りました。コンビニでアルバイトをしながらボクシングジムに通い、プロボクサーを目指していた時に震災にあいました。地震の揺れの中、近所の人たちと声を掛けあい、父母と姉、妹と2歳の弟の6人で津島の体育館に避難しました。津島に1日いた後、数か所の避難所を経て従妹を頼り練馬に来ました。

震災後、姉は神奈川の会社に就職して一人暮らし、僕も品川にあるボクシングジムの合宿所住まいなので、避難先のマンションには、父母と大学1年の妹、小学2年の弟の4人が住んでいます。浪江の自宅には、一度だけ家族みんなで帰りました。長く閉め切っていた家は、ネズミの被害もあり荒れていました。酒田は、山側の居住制限区域です。父も母も、自宅に帰ることは無理と考えているようです。

◆**フェザー級4回戦ボイとして**  
今は、フィットネストレーナーとビル清掃のアルバイトをしながら、プロボクサーとしてワタナベボクシングジムに所属しています。ジムには世界チャンピオンの内山高志をはじめ、約40名のプロボクサーが所属しています。厳しい練習を乗り越えてプロとして活躍している人たちなので、人間的にも尊敬できる人が多く、ジムでの練習は苦になりません。4回戦ボイとしての僕のリングでの戦績は、6戦3勝。上を目指して、毎朝5時から走り込み、8時からアルバイト、夕方5時からジムでの練習を続けています。

◆**浪江の仲間**  
夢は、世界で活躍するボクサーになること。プロボクサーになることを反対していた家族も、今では試合のたびに応援に来てくれます。福島県浪江町出身という僕のプロフィールを知って、「同じ福島県出身だから応援するよ!」と言ってくれる人も少なくありません。中学や高校の同級生も試合を見に来てくれます。東京周辺で暮らす同級生たちとは、試合の時以外にも月に1〜2回会い、仕事のことで、これからのこと、遠慮なく思ったことを言い合っています。東京で新しい友人もできましたが、やっぱり、同じ浪江町で育った仲間とは違います。

◆**大好きな請戸の海**  
震災がなかったら、東京に来て本格的にボクサーを目指すのは、もっと後になったと思います。震災は、次の一步を踏み出すきっかけにもなりました。人生は後戻りできません。悪い方には考えたくはありません。僕が浪江が一番好きなのは「請戸の海」です。山があり、川があり、海があり浪江の風景は僕の自慢です。福島県浪江町出身であることを誇りにして、世界的なプロボクサーを目指したいと思います。皆さん、応援してください。



# 鈴木 健一さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：5月28日 「平成28年7月 広報なみえ掲載」

## ゼロからイチへ。 ここ閉上で新たなスタートを

名取市<sup>ゆりあげ</sup>閉上。津波被害のシンボルとして全国ニュースにもたびたび取り上げられる日和山のすぐ側で、鈴木さんご家族の新たな挑戦が始まっています。

閉上地区水産加工団地の完成記念式典（5月26日）を終えた直後、「鈴栄」の真新しい工場に伺いました。敷地内に建てられた別棟の直売所には、新天地で再起を図る「鈴栄」のニュースを聞いた方なのではないでしょうか、ご自慢の「ちりめん」を求めに訪れていました。



▲これからに向けて熱い抱負をお話くださった鈴木健一さん

◆子どもたちのために、ともかく遠くへと、西に向かいました  
震災が起きたのは、中学校の卒業式に出席した長男と妻、娘との4人で遅いお昼を済ませ、自宅の工場<sup>（白魚と蛸を加工している時でした）</sup>で白魚と蛸を加工

◆神戸・舞子での暮らしは、大きな収穫がありました  
阪神・淡路地方の早春の風物詩「いかなごの釘煮」の産地として知られる舞子は、瀬戸大橋の傍にあり、漁業や水産加工業が盛ん

な地域です。避難しているとはいえ絶好の機会と思いい、地元漁協さんや、向かいの淡路島に浪江の時から取引をしていた加工機械メーカーがありましたので、地元のちりめん加工工場などを紹介していただき訪問、見学をさせていただきました。

◆工場の借金を返し、浪江の魚が評価を取り戻す日まで、ここで頑張ります  
私も妻も、海辺の舞子が大変



▲直売所の前で、ご家族揃って。妻の典子さん、長女の杏梨さんが出迎えてくださいますよ

**「鈴栄」直売所**  
〒981-1213 宮城県名取市閉上3丁目90-1  
平日・土曜日：10時～16時  
日曜日・祝日：9時～16時 ※不定休  
お問い合わせ：TEL 022(393)6303

団地が造られ、建設に伴う補助金があるという話を聞き、説明会に出席したことがきっかけとなり、工場再建を決心しました。事業は無事に採択され、今年の春、自宅も名取市内に移しました。  
この団地には、私も鈴木栄の他に、名取市の3社と相馬市の2社が新工場を建てましたが、それぞれ扱う食材や加工方法、販路などが異なります。私どもは石巻港などに揚がる地元の小魚を使つて、小売りにこだわった製品づくりをします。よそ者ゆえゼロからのスタートですが、ファンづくりをしながら、地元の食材を活かした新ブランドを作りたい。浪江に対する思いは強いですが、今ほともかく、この生業<sup>なりわい</sup>を軌道に乗せたいです。



## 吉田由美子さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：6月20日 「平成28年8月 広報なみえ掲載」

### 癒され、励まされるたびに、私もそんな “元気の素”になりたいと思っています

梅雨の晴れ間、阿武隈高原の爽やかな風が心地良い日に、田村市船引町のご自宅にお邪魔しました。敷地内には、交流拠点にと願って造られた、可愛らしいログハウスのサロン兼手芸店『Iyanbee(いいやんべえ)』があります。

たくさんの人たちの手によって作られたさまざまな作品に囲まれて、訪れた方々がお喋りをしたり、ゆったりした時間を過ごしたりしながら元気になって、「明日も頑張れるよ!」と言ってくれるような場所になったら嬉しいと、吉田さんは話してくださいました。



▲今、人気の麻紐バック(自作)を手に。  
「まもなくイベントなのですが、間に合うかな」と笑っていらっしゃいました。

◆3月11日、あの大地震の時はどうしていらっしかったですか  
双葉町の実家で凄まじい揺れに襲われました。窓ガラスには亀裂が入り、庭の井戸から水が逆流していました。同居する夫の両親が心配になり、急いで戻ろうとしましたが、道が隆起して3時間もかかりました。義父母と子どもたち6人が住む自宅は築100年以上経つ古い家でしたが、相当丈夫に建てられたのか、それとも室原の地盤が頑丈だったのか、ものが落ちたり、停電になったりしたものの、何ともありませんでした。

ただテレビもラジオもつかなくなったので原発事故のことは全く分からず、4日目に訪れた自衛隊の方々から避難を告げられました。渋る義父を説得し、伊達市保原の叔父の家に。既に大勢の親戚が身を寄せていましたので、義父母を預け、夫と私と子どもたちは飯坂温泉の旅館に3月19日まで滞在しました。飲料水もお風呂も有り難かったです。

◆この船引の家に落ち着かれるまでのことをお聞かせください  
友人から「新潟県上越市に直ぐに入居できるアパートがある」と連絡があり、19日に移動しました。驚いたことに、部屋には人数分のお布団が用意され、近所の方々がお料理や鍋や釜、衣類に至るまで差し入れてくださいました。さらに、支援物資の案内をしてくださるなど、心を尽くして助けてくださいました。そんな上越市で当分暮らすつもりでしたが、社会から取り残されないよう、介護の資格取得を目指して学校にも通いました。今でもその時の仲間とは親しく連絡を取り合っています。

2013年に義父母が郡山市の借上げ住宅に移り、私たちが高齢の二人を見守るために福島に戻りました。義母は一昨年亡くなりましたが、2014年春、この家が見つかりました。ここは、ふるさとの室原を思い出させるような、静かでのんびりとしていて、大らかな自然が楽しめます。義父も環境のおかげでしよるか、元気になりました。



▲船引三春ICから田村市方面に向かって車で約5分。道路沿いの看板が目印です。

#### 『Iyanbee(いいやんべえ)』

田村市船引町春山仲ノ縄419番1  
TEL 080(5221)1319 (吉田さん携帯)  
URL <http://s.ameblo.jp/iyabee>

◆『Iyanbee』のことを詳しく教えてください  
このログハウスは、散り散りになった浪江の方々や親しくなった手芸仲間の交流の場にするためにつくりました。もともと手芸など、ものづくりが好きで、県内各地で開かれるハンドメイドのイベントに参加したり、浪江町の交流施設で教えたりするうちに、ここを手芸品店にしたら集まり易いのではないかと思います。今年4月にオープンしました。作り手はおよそ12、3人。作品は100点以上展示、販売しています。浪江のタブレットに頻繁に投稿したり、ネット販売をしたり、イベントに参加した時には口コミで宣伝したりしながらここをみなさんに伝えていきます。

これからもやりたいことはたくさんありますが、どなたでも気軽に来ることができるよう癒しの空間として、発信し続けたいと思っています。



## 村井阿理沙さん(棚塩)

取材者：浪江町役場 佐々木・鳴原  
取材日：6月24日 「平成28年8月 広報なみえ掲載」

### 自身も成長して、 社会的に還元できる活動にしたい

国際協力機構（JICA）青年海外協力隊の平成28年度1次隊として、カリブ海にあるジャマイカへ2年間派遣される村井さん。初めての活動に対して不安に感じることはあまりなく、期待度95%とおっしゃいます。出発を3日後に控えての意欲あふれる気持ち、将来取り組みたいことなどを伺いました。



▲人との交流が好きという村井さん。  
聡明で明るい笑顔が素敵でした。

#### ◆浪江の思い出

毎年のように友人と行っていた十日市では、チキンステーキとりんご飴を食べ、高校時代は自転車でサンプラザへ行き、友人とプリクラを撮ったりショッピングを楽しみました。また、うなぎ屋さんでのアルバイトや、みんなで海に行ったこと、縄のれんでなみえ焼そばをよく食べたことも思い出します。

#### ◆仕事と海外協力隊応募のきっかけ

新薬開発のための治験データを集める会社で海外営業をしており、年に2〜3回アメリカへ行っていました。大学もアメリカに留学したので、英語に不自

由はありません。青年海外協力隊に興味を持ったのは中学生の頃。アフリカを特集した国際協力のドキュメンタリーで、子どもたちの綺麗で純粋な笑顔を見て、自分の力でこの笑顔を作りたいと思いました。それから時間は経ってしまいましたが、会社の上司と将来について話すうちに背中を押してもらい応募しました。

#### ◆活動内容・やりたいこと

これまでの仕事の経験を即戦力として活かして、現地語が英語のジャマイカは第一希望でした。職種はコミュニティ開発。ゴミに関する改善と現地のNGOとの活動を通してNGO自体の活性化、資金の調達も要請内容に含まれています。現地の方と密着しながら、地域のかの問題点も一緒に探し出し解決策を見つけて活動をしていきたいと思っています。

また、現地の方の収益につながる活動として、音楽、アート、リサイクル商品販売などのイベントを開催して住民を巻き込んで開発してみたいと思っています。押しつけではなく、現地の成

長と特徴を生かしながらどう活動するかの模索中です。

#### ◆帰国後のこと

5年以上働いてきたことや留学の経験、能力を活かせる機会を与えてもらったので、自分の成長も楽しみで興味があります。私自身は行政の仕事をしたことがないので、教えることより学ぶことが多いと思います。派遣を通して学んだことを活かし、社会的に還元することでミッションは完了できると思っています。帰国後は復職し、発展途上国に対して安くて質の良い薬を届ける活動をしていきたいし、青年海外協力隊に興味がある人の後押しをしたいと考えています。

復興を進めている途中の浪江・双葉・福島県には、もう少し海外と繋がりを持って活性化できるような形で協力していければと思います。いろいろな国や他の県からサポートを受けながら復興に向けて頑張っていることを忘れてはいけないと思っています。帰国は2年後になりますが、良い形で報告できるように頑張ってきますので応援よろしく願います。



# 志賀みき子さん(樋渡)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤  
取材日：6月24日 「平成28年8月 広報なみえ掲載」

## 床屋にお越しいただいていた皆さま、お元気ですか。私は那須で頑張っています！

震災前は、樋渡地区で「理容しが」を営んでいた志賀さん。現在は、栃木県那須町に新築した自宅で次男と暮しながら、自宅のすぐ隣に開店した「いなか本舗」で「なみえ焼そば」や定食などを提供しています。震災以後、気になっているのは、床屋に来てくださっていた方々の近況。「みなさん、どこでどんな暮らしをされているのか…」。離ればなれになった知り合いとの再会を切望していらっしゃいます。



▲「いなか本舗」の店内で、「定食：なみえ焼そばのAコース」を前に

◆娘の側で暮らすことを決断  
現在住んでいる那須町に引っ越したのは、平成27年2月。次女(娘)が那須町に土地を求め定住することを決めたからです。息子とも相談して、子どもの側で暮らしていこうということになりました。その後、平成27年11月に「いなか本舗」を開店。なみえ焼そばや定食をランチタイムに提供しています。

◆二本松市の仮設住宅での暮らし  
震災後は、川俣町や猪苗代町に避難し、長く過ごしたのは二本松市の仮設住宅でした。自治会では班長を務めさせていただき、イベントや野菜の販売などを手伝ったりしました。浪江の方が住んでいたこともあり、知り合いや友達ができてコミュニケーションが取れていましたよ。仮設住宅に住んでいる期間には、同居していた叔母が平成24年に、夫が平成25年に亡くなりました。悲しく寂しい時間が流

『いなか本舗』  
営業時間：11～14時  
(3人以上の予約で時間外も可能)  
定休日：月曜、火曜(臨時休業もあり)  
栃木県那須郡那須町高久乙594-92  
(道の駅「友愛の森」の裏手)  
TEL 0287(74)5822

店は落ち着いた古民家風の造りでテラス席があり、席数は13席ほど。店横には小川も流れていま

す。この周辺には、浪江町や双葉郡から避難されている方が多くいます。この周

方も結構おられます。そんな皆さんが気軽にお茶飲みにきて欲しいですし、さらには那須町のお客様との交流も楽しみたいと思っています。あとは、自分のボケ防止ですね(笑)。

◆避難指示解除後の悩みや心配  
浪江の暮らしでの大切な思い出は、友人夫婦や知人と一緒に、双葉町の石熊山に山小屋を作って楽しんだことです。斜面を整地し、しいたけの原木を置き、花見や芋煮会、カラオケなどをしたものです。ですが、今は線量が高いので今後も行けるようになるかわかりません。一緒に過ごした友人夫婦も今はバラバラ。残念です…。

今後、避難指示解除になったらからどうするかについては、悩んでいる状況です。隣近所の方は帰るのだろうか、全体でどのくらいの方が戻るのだろうか。息子には震災に関わる残務を残したくない、などいろいろな考えます。しばらくは様子を見たいと思っています。

心配なことはいろいろありますが、この店でいろんな方と語り合い、交流できればうれしいです。



福島県

## 三浦 幸子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：6月8日 「平成28年8月 広報なみえ掲載」

### 普段のことを普通に。 いつもの暮らしってそんなものですよ。

福島市駅前の商業施設A X C（アックス）の2階で、工房「ふく福」を営んでいた三浦幸子さんにお話を聞いたのは、ほぼ丸2年前になります。そのお店は、昨年12月にA X Cの1階・ニュー福ビルに再オープン。お店やご家庭の様子やこの2年間の変化、そして、これからに向けての思いなどについて伺いました。

作り手の方々は30人から40人程に増えました。遠くは福岡から首都圏、県内はいわきや会津若松、南相馬や福島の方々などです。洋服の仕立てやリメイ

◆移転されましたが、新しいお店はいかがですか  
一昨年11月、A X C 2階のお店の契約更新がままならず、福島駅周辺で仕事場を探しました。駅西口の事務所まで電話兼サロンのようなことをしながら約1年弱。幸いなことにニュー福ビル1階の路面店を借りることができて、昨年12月14日に再オープンしました。以前のよう

ク、お直しから手仕事のバッグや服飾小物、手工芸品など、作り手の得意なものに合わせてもらっています。何度もお見えたたくお客さまからのご要望も取り入れながら、確かなものをご提供しています。そして、お客さまに満足していただけるよう、グレードの高い商品作りを心がけたいと思っています。駅前通りに面したお店になったことで、車椅子の方も気軽にいらつしやるようになりました。外国の方の来店も増えました。特に和風小物や相馬野馬追をモチーフにした飾り物などが人気です。近所には、まもなく福島県立医大の研究機関が立



▲ニュー福ビル1階。路面店となった新しい「ふく福」の前。  
「気軽にお立ち寄りくださいませ」とのことです。

**工房「ふく福」**

10時～18時／定休日：日曜日

ち寄っていただけけるよう、9月末には店頭のディスプレイも大きく変えようと計画しています。

◆ご家族にはお変わりありませんか

母は変わりなく、今年も山形にコゴミや蕨を探りに行ってきました。近頃は、デイサービスに行く回数が増え、周りの方々とおしゃべりすることが楽しいようです。また、日々の晩酌も楽しんでます。

夫はこの春、福島の復興に関わるために戻ってきました。娘はエステティシャンとなり、いづれは千葉から福島に戻って仕事を続けたいと言っています。私たちは福島市に居ることに決め、来春には飯坂電車・平野駅近くに家を新築する予定です。家族みんなと過ごせることが何よりも楽しみです。

近々、夫は浪江の家を全部片付けるようですが、私が気になっているのはお墓のことで。盆供養など仏さまや季節の行事をきちんと行うことは、何ととっても家族の基本ですから、普通にできることが一番です。新しい自宅の近所にお墓を探し、夫の両親を早く供養したいと思っています。



福島県

## 岡田ミヨ子さん(井手)

〔平成28年8月 広報なみえ掲載〕

いわき市内にお暮らしの岡田さんから、近況をお知らせいただきました。

### お世話になった、たくさんの方に お礼の気持ちを伝えたいです



▲工房の入り口の前で



▲浪江から持ってきた大切なミシン

**洋服のお直し工房  
『ファッションルーム 杏』**  
いわき市平中山字柳町115-1  
TEL 0246(23)0808

また町内に  
ある寿し松様  
にも、知人の  
紹介で、1ヶ  
月間もギャラ  
リーに作品を  
飾らせていた  
だいたことが  
あります。ご  
迷惑もあつた

最後に、あの当時、わが会社  
で労働された従業員の方々に感  
謝するとともに、どうかお体を  
大切にお過ごし下さることを  
願っています。

あの日から5年5か月が経ちます。わが浪江町での思い出がいっぱい。出逢った人達すべてが脳裏に浮かびます。

震災で浪江町がバラバラになりました。こんな事があっていいものか。突然の不安と驚きで、余儀なく避難をしたあの日から、忘れられない想いが悲しみ、悔しさとなって残っています。でも、日に日に薄れていきそうな想いの風景となっていくそうです。

◆夫は南相馬、私はいわきに暮らすことに

必死で車を走らせ、東京に向かったあの日。道中辺りは暗くなり、途中休みながら、夫の親戚がいた横浜までたどり着きました。その後、引越を幾度としました。住まいは団地、マンション、アパートとすべて味わいました。

夫は、浪江緑化という造園業の会社を営んでいました。一時は廃業も考え、ずいぶんと葛藤しましたが、造園建設業協会の皆さんの後押しもあって、南相馬で事業を再開することとなりました。

私はいわきに来て3年になります。やっと物件を見つけて、義母と2人で暮らしています。近くに娘夫婦が住んでいるので、孫の世話などもあり、励みになって

います。

週末には、夫も南相馬の住宅兼事務所から帰ってきます。私も時に南相馬に向かいますが、なかなか思うようにはいきませんが、体力の続く限り、頑張つてやるしかありません。

◆浪江町での思い出

私は震災までは、家業の事務と、独身時代からしていた洋服の縫製の仕事をしていました。

思い出おこせば、5月の連休、5日間にわたり開催された「大せとまつり」。記憶では、8年間くらいは出店させていただき、お世話になりました。大堀相馬焼という伝統ある行事に参加させていただき光栄でした。

また、十日市には親戚である横山輪業の軒先に出させていただきました。おじさんとおばさんに商店街の皆さんへ声をかけていただき、ありがたい思い出があります。

夫も、消防団をはじめ地域の役員をいろいろとやっています。また、有志達で桜の植樹や休耕田での蕎麦づくりといった活動もしていました。蕎麦打ちもしていて、会社のお客さんにふるまったりもしていましたね。

◆洋服にかかわる仕事を再開しました

私は、自宅をやつと、ミシンで洋服にかかわる仕事ができるようになり、早1年が経ちます。お客さんに少しでも喜んでいただき、お役に立てれば嬉しいです。好きな仕事ができることは、生きがいとして夢中になります。

ふと、手を止めることがあれば、また思い出してしまうので、少しずつ仕事ができることをお客さんに感謝しながら、みんなが毎日健康で過ごせることを望んで、体力の続く限り、心配もありませんが、浪江の想いを胸に、毎日頑張つていこうと思つています。



## 渡部 徳之さん(小丸)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原  
取材日：6月21日 「平成28年9月 広報なみえ掲載」

### それぞれの事情に合わせていくしかないと思う



浪江では会社に勤めながら田んぼや牛を育てていた渡部さん。

昨年6月に二本松市に家を構え、お母さんと暮らしています。近所に借りた畑で自家用の野菜を育てながら、これからについて模索中です。

#### ◆浪江での生活

震災の5年ほど前に父が亡くなり、父の仕事を引き継がないといけないという思いから田んぼや牛を育てることになりました。ほとんど経験がなかったため、近くの本家に相談しながら一からのスタートでした。朝、明るくなる前に牛の世話をしてからまた世話をするという生活で、母もまめに草刈りをしていました。

#### ◆震災から避難するまで

震災が起きて、牛がいるので避難せずに家にいました。近所も何軒かいたし、電気も通っていたのでそのまま生活していました。テレビで爆発を知りましたが実感がなく、請戸の近くまで町の様子を見に行くと人がいなくなっていました。そのうち津島でもだんだん避難する人が出てきたので、母と軽トラックで犬と猫を連れて家を離れることにしました。避難当日は寒い中、車中泊。それから川俣、伊達、猪苗代と避難先を転々とし、震災から5か月後に知人に誘われて二本松の仮設住宅で母と暮らすようになりました。

#### ◆仮設暮らしから今に至るまで

旧平石小学校仮設で約4年間避難生活をしましたが、その間の2年ほどは班長として自治会の手伝いをしました。浪江では病気知らずの母でしたが、仮設に来て2年目から体調を崩し入院。本人は入院が必要なことをなかなか受け入れられない様子でした。今は介護認定を受けて、週に1回ヘルパーさんに来てもらい、糖尿病に必要な食事管理をしてもらっています。

家を構えることになったきっかけは、知人の「帰還困難区域で帰れないけどこれからどうするの？」という問いかけでした。自分のところは除染や整備をしていないので、漠然とこちらで生活するしかない、復興住宅か借上げに住もうかと思っていました。家が、その問いかけから、じゃあ、やるか、と心を決めました。もちろん、どうやって建てたらいいかという不安はありました。でも、家ができて引越してから自信がきました。ちよつとずつ近場の人も馴染んできました。去年から畑を借りて、浪江ではやったことがなかった玉ねぎの収穫をしました。今は、キュウリ、ナス、



▲幸運を呼ぶふくろうグッズを集めています

トマトなどの夏野菜を育てています。母もたまに草むしりなど手伝ってくれます。何か励みになるといいのですが。

#### ◆今、思っていること

こちらに家を構えたから周りの付き合いをしていくしかないと思っと思っています。みんな事情はそれぞれだから、向こうで生活できる人はいいけど、うちはできないし。若い世代が戻る見込みがあればいいんだらうけど、向こうで生活するのは難しいんだらうな、多分。これから建設関係の資格を取って、それを活かせるような仕事探しをしていこうと思っています。



## 渡部 茂子さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：6月28日 「平成28年9月 広報なみえ掲載」

### 浪江の皆さんとおしゃべりすることで、 元気をもらっています



▲「なみえ絆いわき会」の活動拠点「なみえ交流館」にて。いつも笑顔で活発に活動する渡部さん。

浪江町では印刷業を営んでいた渡部さんご一家。会津と愛知県豊橋での避難生活を経て、平成23年7月に福島県いわき市に移りました。

現在、茂子さんは市内の復興住宅でご主人・お義母さんとともに3人で暮らし、「なみえ絆いわき会」のメンバーとして、訪問ボランティアを続けています。

◆訪問活動「ぐるりん」  
いわき市に避難した浪江の人たちが集まろうじやないかというところで、平成24年2月に「なみえ絆いわき会（以下、「絆会」）が発足しました。市内には浪江町民が入居できる仮設住宅がなく、ほとんどの方が借上げに住んでいたため、町の情報も支援もなかなか届かなかったんです。それで男性の有志が会を立ち上げ、浪江の人に呼びかけて会員になっていただきました。「絆会」の活動の一環として、私を含め14人の女性がペアを組んで市内に住む浪江の方のお宅を毎月、訪問しています。名前は浪江のバスにちなんで「ぐるりんこ」。私は鈴木幸子さんとペアを組み、小名浜地区の50軒ほどを担当していますが、おしゃべりしてるとすぐに時間が過ぎてしまうので、3日間くらいかけて回ります。「ぐるりんこ」を始めたばかりの頃は、人と話をする気持ちになれないと言っていました。でも、やっぱりお顔を見て皆さんのお話を傾けることが大事だよねってメンバーと話し合い、訪問を続けるうちに結果が出てきました。話をするうちに涙を流され、最後には笑顔になってくれたり、「次はいつ来てくれるの」と聞かれたりするところもあるし、なにより元気な方が増えました。私も、皆さんとおしゃべりすることが生きる張り合いになっています。

◆思い出は誰にも奪えない  
浪江では、夫と息子が印刷業を営んでいました。原発事故のために印刷機器はすべて使えなくなり、借金だけが残ってしまっただけで、家業は廃業せざるを得ないし、年金だけでは暮らしていけない。都民一千万人に対して私から二万人は虫けら扱いじゃないかと、悔しさが胸が苦しくなってきたこともあります。でも、そういう気持ちは封印したんです。目をつぶると、震災前の浪江の懐かしい景色しか頭に浮かびません。ふるさとの思い出は誰にも奪うことができないってこ

とに気づいたら、怒るのがばかしくなっちゃったんです。自分の力でできるだけのことはしなくちゃと思って、賠償金を活用してローンを返済し、機械類は専門業者に頼んで処分するといったことを少しずつ進めています。1日1ミリずつ前に進んでいる感じがですね。

◆孫たちに伝えたい浪江の良さ  
気持ち切り替えられたきっかけの一つは、外国の芸術家さんが東京で開催した写真展です。原発事故で無人になった町の記録を残すという趣旨の写真展で、2年前、私も頼まれて被写体になりました。撮られた時は、なんでこんなことをするんだろうって思いましたが、写真があれば孫たちに「ここが祖父さんの働いていた場所だよ」と伝えられますよね。遠い外国の方たちが浪江に目を向けてくれていることにも驚きましたし、自分らも孫たちに浪江の良さが伝えられるよう、浪江に足を運んで家の片づけをするなど、何かしなくてはという気持ちになってきたんです。今後については、浪江の状況を見ながらじっくり考えたいですね。人とのつながりを大事にし、訪問活動はこの先も長く続けたいと思っています。

とに気づいたら、怒るのがばかしくなっちゃったんです。自分の力でできるだけのことはしなくちゃと思って、賠償金を活用してローンを返済し、機械類は専門業者に頼んで処分するといったことを少しずつ進めています。1日1ミリずつ前に進んでいる感じがですね。



愛媛県

## 渡部 直美さん(酒田)

〔平成28年9月 広報なみえ掲載〕

取材者：NPO法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永  
一般社団法人いなかパイプ 佐々倉 取材日：7月25日生きてることに感謝しながら、  
夢に向かって歩いています▲昭和レトロな店内。  
こだわりのコーヒー  
カップ。是非一度、  
足を運んでみてくだ  
さいね。ダイニング雑貨カフェ  
「はじめのいっぽ」愛媛県伊予郡松前町鶴吉713-8  
TEL 089 (900) 1143

気軽に飲み物だけでも来店しやすいようなカフェ、ふらっと立ち寄って楽しんでもらえるように可愛い手作り雑貨のお店、この組み合わせです。ここは私の夢を叶える場であると同時に、みんなの集まる場所になりたいと思っています。子育て中のママも高齢の方も、避難してきた人も地元

の人も、対象は決めずに、本当に誰もが集まれる場所。お店が営業してない時には場所を貸し出して、いろんな体験会などに利用してもらえたら嬉しいです。婚活パーティーも面白いですよ。

◆夢の一步を踏み出されたばかりですが、そのずっと先のことをお考えでしたら教えてください。

震災直後、子どもにはひもじい思いをさせました。それでも、生きてるって運がいい、生きてるだけでもすごいんだと感じています。あの日、避難するときに、飼っていた豚を野に放したんです。それが秋になって、見つけたと連絡が来たので、すぐに迎えに行つて今も一緒にいますよ。震災から5年が過ぎて、借家だけれど、家に帰るとホッとします。愛媛に愛着を持って暮らしています。テレビで福島の映像を見ると、今でも涙が出ますね。ここにも海はあるけれど、やっぱり福島の、波のある海が好き。福島の梨やりんごが美味しかったな。

じゃ、福島に戻るのってどうと。移住も考えています。まずは、安心して暮らせるところで子どもたちを育てあげたいです。そして、子育てが落ち着いたら、世界中の国を巡りたいな。それまで、しっかりと働いてお金を貯めな

◆カフェをやるうと思われたきっかけは、何だったのですか？

元々、お菓子作りが大好きだったんですよ。浪江に住んでいた頃、実家のある南相馬で託児所を開いていました。私はチャイルドメインダーという資格を持ち、子どもたちと接していたのですが、そのおやつに私がケーキを焼いていたんですよ。愛媛に避難してすぐは子育てと農業を一生懸命やりましたが、長男が産まれてからは、近所の食堂でパートを始めました。パートに出始めて3年近くが経つた時、週に一日だけオープンするケーキ屋さん「なのみスイーツ」を始めたいんです。イベントにも出店して、ケーキのファンも増えて、楽しかったですね。でも楽しいのは楽しいんです

けど、まだ子どもが小さいこともあり、何かひとつに集中したいと思うようになりました。「自分で何かを。やるなら好きなこと。」30歳を過ぎ、夢を早く叶えなくちゃいけないという焦りもありました。友達も「やるなら今だよ」と背中を押してくれ、たまたま良い物件が見つかったので、「よし、やろう!」と。

◆お店の名前、素敵ですね。込められた想いを聞かせてください

朝、ぼんやりしている時にパツと思いつかんなんです。「はじめのいっぽ。わ、いいな、これだ!」って思いました。開店は28年4月29日、4歳になる長男(寛助君)の誕生日にしました。ダイニングとしては、毎朝仕入れに行く新鮮な地元の野菜を使ったランチ、食事をしなくても

が、テレビで福島の映像を見ると、今でも涙が出ますね。ここにも海はあるけれど、やっぱり福島の、波のある海が好き。福島の梨やりんごが美味しかったな。

じゃ、福島に戻るのってどうと。移住も考えています。まずは、安心して暮らせるところで子どもたちを育てあげたいです。そして、子育てが落ち着いたら、世界中の国を巡りたいな。それまで、しっかりと働いてお金を貯めな



# 木幡 四郎さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：8月10日 「平成28年10月 広報なみえ掲載」

## 復興に向かって気持ちを一つにしたい

町田市に避難し、被災当事者団体『サロンFMI会』を立ち上げた木幡四郎さんに、今の暮らしと今後への思いをお聞きしました。



▲優しい笑顔の木幡四郎さん・美智代さんご夫婦

◆**会の立ち上げ**  
同じように町田に避難し、慣れない東京での暮らしに苦勞している人たちと行き会った中で、『サロンFMI会』を立ち上げました。Fは福島、Mは宮城、Iは岩手、被災した東北3県から避難している人たちが助け合い、交流できたら良いと考えて

り、班制度を設けたりしました。災害時には、待っているだけでは駄目だと思います。「こうしようか！」と言い出すことが大事です。警察の指示を受け津島の避難所を出た後、東京に住む子どもたちと連絡を取り合い、栃木、八王子、府中を経て町田に避難してきました。

◆「こうしようか！」と  
言い出す  
震災直後は「いこいの村」に避難、その後、津島の避難所に近所の人たちと一緒に移動しました。津島には二晩いました。原発事故のことなど頭にはなく、できるだけ避難所生活の負担を和らげようと、仮設トイレを作った

◆**会の役割が広がる**  
震災から5年を過ぎ、地域での出番が増えてきました。昨年12月には、田舎でやっていた餅つきの際験を活かして、東京近郊の団体と一緒に「餅つき大会」を開催。400名もの参加がありました。また、手作り品を販売し、大島や熊本といった

の団体名です。昨年までは、東京ボランティアセンターの支援を受けて運営していましたが、今年度から自立し、活動を継続しています。会を立ち上げた当初は、パソコン操作もままならず大変でしたが、「みんなのため」と今日まで頑張ってきました。浪江町の国会意見書提出にも参加しました。100人を超える町民の参加がありました。福島の関わりがなかったのが残念です。1自治体では主張は通りません。福島県としてまとまって意見を出していく必要があるのではと強く思います。

◆**避難指示解除について**  
避難指示解除が迫ってきています。今、帰れる場所なのか。除染作業が遅れ、仮置き場に置かれたままのフレコンバッグの山を見るにつけ、不安になります。いつかは帰りたいという思いはあっても、まだ安心して帰れる場所はないのでは、と感じています。国や福島県、浪江町といった行政は、何を根拠にして避難指示を解除しようと思っているのでしょうか。

◆**本音の話がしたい**  
私は、町田市に中古の一戸建て(仮住まい)を求めました。中古でも庭のある家に住みたかったのです。今では、会の役員会も自宅で行っています。浪江にいた頃は、近所づきあい、親戚づきあいが盛んでしたから、人づきあいは苦になりません。会を運営する中で、復興に関しての情報もたくさん得ることができず。ただどうしても、表に出る話は真実味が欠けます。もつと本音の話を聞きたい。そうすれば、みんなの復興に向かう気持ちの一つになるのではと思います。浪江にできる「道の駅」は情報基地としての役割も担うと聞きます。交流の場、意見交換できる場として期待しています。

被災地に恩返しの意味を込め、寄付も行いました。  
新しい住まいを関東近県に求める人たちが目立ってきました。転居した先では、また新たな関係を作らなければなりません。『サロンFMI会』のメンバーの転居先の支援団体と共同で企画を実施することが増えてきました。先日、神奈川の「歩む会」との共催で、バスハイクを実施しました。チラシだけでは参加者は集まりません。「一緒に行こう」という声かけがあれば安心して参加できます。『サロンFMI会』のネットワークが活きるのです。

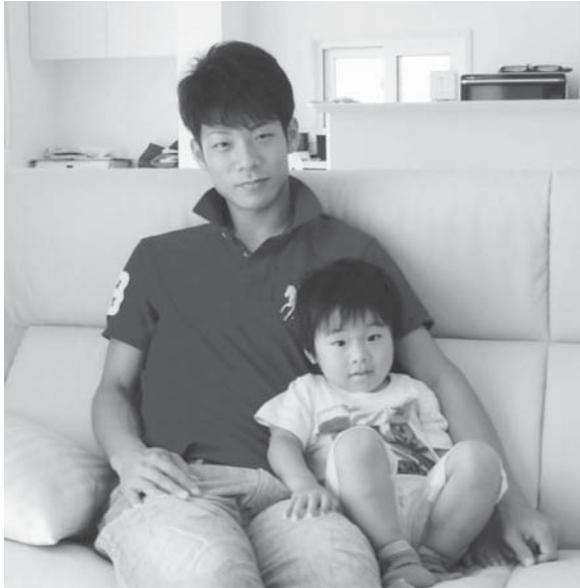
被災地に恩返しの意味を込め、寄付も行いました。  
新しい住まいを関東近県に求める人たちが目立ってきました。転居した先では、また新たな関係を作らなければなりません。『サロンFMI会』のメンバーの転居先の支援団体と共同で企画を実施することが増えてきました。先日、神奈川の「歩む会」との共催で、バスハイクを実施しました。チラシだけでは参加者は集まりません。「一緒に行こう」という声かけがあれば安心して参加できます。『サロンFMI会』のネットワークが活きるのです。



## 田村 善孝さん(井手)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：8月11日 「平成28年10月 広報なみえ掲載」

### いわきには、大勢の仲間がいて心強いです



▲お父さんが大好きなのですね。親子で素敵な笑顔を見せてくださいました。

震災後に結婚した梓<sup>あずさ</sup>さんと、息子の彪雅<sup>ひゅうが</sup>君と3人、いわき市内の新しいお家での暮らしが始まっています。明るい陽射しが差す家の中を、3歳になる彪雅君が活発に走り回っていました。

◆3・11東日本大震災、翌日の福島第一原発事故。あの日、あの時、どうされていましたか  
高校の卒業式は終わっていて、「寿し松」でバイトをしていたので、震災の当日も午前中から午後2時まで仕事をして、浪江中学校の近くの友人宅に寄っていました。その日は、父の車を借りて出かけていたので、一緒にいた同じ野球部の友人たちを乗せて、地震で隆起したり亀裂が走ったりしている道を荻野や川添まで送り届けながら、家に帰りました。

家の蔵は崩れ、平屋の家の中は落ちてきたものなどで足の踏み場もないほど散乱していました。夕方に父と連絡が取れるまで、祖父と二人きりでした。その晩は停電・断水している状況で、居間を片付けて雑魚寝をしました。

眠れずに早起きして犬の散歩をしていると、5時くらいだったと思いますが、防災無線で原発事故に伴う避難の呼びかけがあり、津島へ向いました。避難所は既にいっぱい、川俣町まで移動しました。リオンドールで食料などを買い求め、再び津島へ戻りました。

まもなく3号機の爆発が起きたので、福島市松川町に住む父の友人宅へ身を寄せた後、神奈川県相模原市の親戚の家へ避難し、父と祖父は1年ほどお世話になりました。その後、二人は二本松市安達運動場の仮設住宅に住んでいます。

◆田村さんのその後をお聞かせください

僕は、震災前に就職先の内定を受けていたので、3月末には

新潟県で入社手続きをして、そのまま着任し3年間を過ごしました。私生活では、当時付き合っていた妻と結婚し、息子が生まれました。

その後、新潟から福島に移り、いわき市内郷に移りましたが、今年春にこの家が完成し、転居しました。会社までは約2時間弱かかりますが、通っています。

勤務先や協力会社、またいわき市内にも、高校野球部の仲間や先輩、後輩が結構いるので、よく会います。特に、近所に住む親しい友人たちや浪江の友人とは、月2、3回は「宅飲み（自宅での飲み会）」をすることが多いですね。妻も、みんなが来てくれることを楽しんでいようです。

浪江町で安心して暮らせるようになるまでには、おそらく10年以上かかるでしょうから、町に戻ることは、今は考えられません。3歳になる息子も、このいわき市の家で成長するのだと思っています。



## 山田 拓樹さん(牛渡)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原

取材日：8月24日 「平成28年10月 広報なみえ掲載」

### 離れていても、浪江町は故郷

公務員を目指し、仙台で大学生活を送っている山田さん。自らの希望で、インターン先を浪江町役場に選びました。意欲的に将来へ向けて動いている山田さんに、これからの抱負と浪江町への想いを伺いました。



▲今年成人式を迎えたフレッシュな笑顔の山田さん

#### ◆卒業式当日に

##### 震災

大震災が起きたのは、中学卒業の報告をしに母と兄との3人で南相馬に住む祖母のところへ行った帰りのことでした。家族は全員無事でしたが、浪江の自宅の1階が潰れてしまったため、着の身着のまま祖母の家に避難。その後、桑折町の親せき宅、二本松市のアパート、福島市のアパートと避難先を変えました。そして、大学入学を機に仙台でひとり暮らしを始めました。

#### ◆公務員を目指し頑張っています

大学生活では、中学・高校と続けていたテニスのサークルに入り、充実した時間を過ごしています。大学での友達もできて、一人暮らしならではの楽しさを満喫しています。身の回りのことは自分でやらないといけないので、大変ですが、

現在、公務員を目指し勉強しています。親の勧めもあり中学生の頃から公務員になろうと決めていました。

インターン先として浪江町役場を選んだ理由は、全町避難という特殊な状況ではありますが、自分にとってとても身近な存在で、公務員という職業についてのイメージを明確に持てると思っただからです。

今日でインターンシップ3日目になります。県外にいると情報がなかなか入ってこないのですが、実際に町内を見て回ると思っていた以上に町が復興していることがわかり、また働いている職員さんの様子を感じることもできてとても充実しています。

浪江町内の様子や役場本庁舎での業務再開の様子も見学できましたし、仮設住宅を訪問して町民の方と触れ合う経験もできました。この1週間のインターンシップの間に経験したことを忘れずに、将来へつなげていければと思います。

#### ◆思い出を胸に将来へ

浪江でのいちばんの思い出は、中学校時代の3年間ですね。学校生活や友達との思い出がたくさんあります。十日市はとても楽しかったです。

震災後は、放射線だけでなく生活環境が大きく変わったことへの不安がありました。特に、高校へ入学するまでの2か月間は不安が大きかったです。その頃、友達とのやりとりの中で、浪江東中学校の卒業生が多数、福島西高へ入学すると聞いて福島西高への入学を決めました。高校では勉強・部活にのびのびと取り組んで新しい友達もできました。浪江の友達とは離れ離れになつてなかなか会えないですが、やりとりはこれからも大切にしていきたいです。

浪江に行くのはお墓参りのときくらいで、今のところ浪江に戻ることは考えていません。これからは夢の実現へ向けて頑張っていきたいと思っています。でも、離れて生活していても浪江町は故郷です。たとえ以前と同じ浪江町の姿ではなくても、この思いは変わりません。



福島県

## 小川 昌幸さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤  
取材日：9月1日 「平成28年10月 広報なみえ掲載」

### なみえの皆さんと近況を語り合いたい！

震災前は、浪江駅前の権現堂で理容店を営んでいた小川さん。今年6月に、福島市佐倉下に新築した自宅兼店舗に引っ越されました。

現在は、理容店を夫婦で営み、家族6人で新しい生活を始めておられます。



#### ◆仮設住宅の理容店に通って4年半

理容店は私の代からはじめました。お客様は、子どもから高齢者まで幅広いですが特に中学生から青年の年代の方たちが多かったですね。工夫していたのは待ち合のスペース。リラクセスできるように配置し、いろんな種類の飲み物を置いていました。

震災直後は、赤宇木、会津若松、そして妻の実家がある秋田へと避難し、2011年4月に福島市にある雇用促進住宅に入居することができました。入居当初は、同じように避難している浪江の皆さんが「私の頭をさっぱりしてくれ」と自宅を訪問してくれました。もちろん理容道具はありませんから、湯沸し温水器のお湯を使って台所で散髪をしたことも。その後、2011年11月には福島市飯坂町にある北幹線第一仮設住宅の理容室で

営業ができるようになりました。今年の7月から福島市佐倉下の新店舗で営業を始めましたが、今も週2回は仮設に通っています。浪江のみなさんがいらつしやいますからね。

#### ◆同級生との交流が励みに

私は、浪江中学校の同級生たちと「羊猿会」を結成し、時々集まっています。名前の通り、昭和42年と43年生まれの同級生たちです。現在のメンバーは約20人。不思議なもので、お互い大人になってから平成7年頃に結成。はじめは飲み会がきっかけでした。規約もつくり、会費も集めて運営しています。飲み会や宿泊の企画の際には、近況を語り合ったり、出来事を報告したり。昨年は日光に出かけ、今年は平泉に行く予定です。これが楽しみでもあり、ほっとできる大切な時間でもあります。現在の店をオープンした時も祝ってくれて、本当に感謝しています。

#### ◆今後への不安

雇用促進住宅に住み、仮設に通って5年が過ぎ、あつというまの時間でした。これからの浪江の家のことを考えると不安です。浪江には、自宅と店舗、そして実家があります。「避難指示が解除され戻れるようになった時どうするか」は考えてもなかなか答えが見つかりません。もし浪江で



#### BARBAR 髪鉄

福島市佐倉下字上谷地8-1

TEL 080 (5225) 1288

福島西インターから車で約5分

できればご予約してご来店ください

営業したとして、お客様が来てくれるのかどうかも想像ができません。今は、現在のこの店を妻と一緒に精一杯やっています。かないと思っています。

#### ◆みんなと近況を語り合いたい

現在「髪鉄」にお越しくだつている方の90パーセントは浪江の時に世話になった方ばかり。福島、郡山、いわき、茨城、南相馬などから時間をかけて来てくださいます。前回の来店時に話した内容の続きを聞くのが楽しみです。「旅行はどうだった?」「あの悩みはその後どう?」なんてね。私たち夫婦の特徴は「普通」なこと。冗談を言ったり、ツッコミを入れたり、笑い合ったり。そんな何気なく近況を話し合えることが楽しみであり幸せです。浪江のみなさん、ぜひ来店いただき近況を聞かせてください。



## 熊本 優子さん(室原)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉  
取材日：9月16日 「平成28年11月 広報なみえ掲載」

### 後ろを振り向かず、今を精一杯生きたい



▲小・中学校の同級生だった熊本優子さんと一重さんご夫妻。山登りも一緒に。

40数年間、ショッピングセンター「サンブラザ」に勤めてきた熊本さん。町の多くの方が顔なじみでした。現在は、福島県伊達市の新築の家で、ご主人の一重さんと明るく元気に暮らしています。店のお客様だった皆さんが元気でいらっしゃるか、と、気遣っていました。

◆ふさが込んでいた3年間  
震災の日は、お店にいました。ガラスが壊れ、棚が倒れる中、お客様を安全な駐車場に誘導しました。その時は、原発のことは、全く頭にありませんでしたね。そして次の日から避難生活が始まり、親戚を頼って本宮、猪苗代、浦和、矢板、那須と移り住みました。  
夫婦二人とも59歳だったので、定年後は室原で農家民宿に取り組みようと準備していた矢先のことでした。そこが帰還困難区域となつてしまい、手入れのできないまま家が朽ちていきます。私たちの気持ちも落ち込み、何

かをする意欲も無くなり、そのうち二人とも体調を崩してしまいました。主人は腰痛が悪化し、私も大病を患いました。  
◆ここで生きていこう  
幸い、今では薬を飲むのも忘れるほどに元気になりましたが、健康を害してみても、生きることの大切さを痛感しました。  
さらに気持ちが切り替わったのは、昨年11月に、伊達市に新しく家を構えてからです。ここで生きていこうと覚悟したら、浪江のことも吹っ切れました。これからの人生を、楽しく悔いなく過ごそうと思うようになったのです。

◆今の暮らしを大切に  
浪江のことは忘れられないし、浪江でしてきたことを変えたくないという気持ちはあります。ここでも家の前に畑をつくり、野菜や果樹を育てて食べていますし、味噌は今でも手作りです。また、浪江の友人や職場の仲間とも頻りに連絡をとり、楽しくおしゃべりしています。  
ふるさと浪江への思いとともに、やはり今の暮らしを大切にしたいと考えています。ここで暮らすために、ご近所さんと積極的にふれあい、自治会活動にも参加するようにしています。新しいつながりを意識してつくる努力が必要だと思っております。

若い頃から大好きだったスポーツやドライブ旅行などを、再び始めようという元気が湧いてきました。まずは健康づくりと、夫婦二人でスポーツジムに通っています。共通の趣味である山登りにもチャレンジしていて、ついこの間も、二人で北アルプスに登ってきました。

◆支えてくれたお客様  
今でも、店のお客様の顔が思い出されます。若い頃から40年間支えていただきました。一緒に歳を重ねてきたので、70代、80代の方もいらっしゃいます。どこで暮らしてもどうぞお元気でいてほしい。今はそれだけを祈っています。



## 今野 千代さん(下津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：9月7日 「平成28年11月 広報なみえ掲載」

振り返ると、「この道を選んでよかった」とつくづく  
思います。これからは、患者さんと出来る限りお会い  
して、昔話がしたいです。

津島診療所の看護師だった今野さんは、震災直後の医療現場に立ち続け、救命救助に  
尽力なさいました。当時の様子をいろいろお聞きしましたが、一人も死者を出すものか  
と果敢に立ち向かった行動力と強靱な精神力に頭が下がります。

平成25年3月に退職され、今は福島市八木田在住。川俣町山木屋でトルコギキョウを  
栽培する妹さん夫婦を手伝ったり、以前お世話になった患者さん方を訪ねて  
話をしたり、手芸を楽しむなど、ご自分の時間を大切に過ごされています。



▲昭和47年に看護師となってから41年。浪江町津島診療所には39年間に亘って勤め、地域の人たちを支え続けた今野さん。今がきっと、初めての長いお休みなのでしょうか。

◆津島最後の患者さんは消防車で搬送されたお爺さん。点滴と酸素吸入で一命を取り留めたんですよ  
震災が起きたのは、津島診療所の午後の診療が始まって間もなくでした。激しい揺れに、医師や私たち看護師、事務職員7人が、めいめいにカルテや薬の戸棚、機材などを押さえました。来院していた患者さんも、幸い怪我もなく無事でした。  
私は、娘の無事を確認して定時まで勤務した後、一旦自宅に戻り、直ぐに津島支所へ向いました。避難所を探している方が15、6人おり、支所の和室で休んでいただきました。全員の食事をと、避難している女性たちと一緒ににぎりを握りました。支所のテレビで、沿岸部に津波が押し寄せ、大きな被害が出たことも知りました。

夜遅くに自宅に戻り、翌早朝に支所に行く、診療所の前に長蛇の列。医師や職員に声をかけて開けました。町内から4、5人の先生方や津島在住の看護師5、6人が応援に駆け付けてくれて助かりました。ありがたかったですね。家族からもおにぎりの差し入れがありました。  
薬の処方、普段ならば数十人ですが、あの時は何百人にもなり、土日も開所して対応しましたが、通院患者さんの分の薬をお渡しすることは苦渋の決断でした。在庫が少なかった上に電話が通じない状況のなか、福島市の業者さんまで役場の職員さんが直接取りに行ってくださるなどの協力をいただきました。その後、安心して仕事をすることができました。  
3月14日の夜中、実家の母や娘、妹家族など10人が二本松市針道の叔母の家に避難し、約1か月お世話になりました。私は翌日、所長と係長とで診察を終えた後、夕方に合流。13年間も共に働いた先生たちと今生の別れになるかと思うと、涙が止まりませんでした。  
◆2011年9月、二本松市油井の運動場に、ようやく本格的な仮診療所が出来ました  
3月16日、役場が二本松市東

和支所内に移転。避難所はどこも満杯で、体調を崩す人が増え、感染の危険がありました。そこで、町の仮設診療所開設が必要となり、整備が進められました。県からは、薬の手配に対する全面的な支援を受け、この頃から医療関係のボランティアも参加していただけるようになりました。娘や富岡町の特別老人ホームに勤めていた若者も手伝ってくれ、本当に心強かったです。また、花き栽培をしている義弟が、避難所の暖房にと営業用の灯油を援助してくれました。  
4月半ば、町民の方々が二次避難所に移ると、診療所も岳温泉「あづま館」の一角に移転。私は勤務先に近いアパートに移り、休みも少し取れるようになりました。  
そして、9月に開設した「浪江町国民健康保険仮設津島診療所」では胃カメラや血液検査もできるようになり、各仮設住宅と診療所を結ぶ巡回バスも運行。患者さんたちが楽に通院出来るようになったんですよ。  
この家は末娘が探してくれ、7月に越して以来ずっと住んでいますが、膝と腰が悪い私には不便です。何とか住み慣れた福島市に落ち着きたいと考えています。



# 豊田 伸一さん・孝子さん・ 美都女さん・将伸さん(権現堂)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉  
取材日：9月29日 「平成28年11月 広報なみえ掲載」

## ヘアサロンにお茶を飲みにきてください

昭和28年に豊田美都女さんが開業した「ヘアサロン美都女」。長年、地元の理容室として親しまれてきました。息子の伸一さん・孝子さんご夫妻、そして孫の将伸さんの三代にわたる理容師一家です。浪江のお客様に支えられて、心機一転、郡山市にヘアサロンをオープンします。



▲新しいお店で。  
右から、伸一さん、孝子さん、美都女さん、将伸さん。



◀ゆっくりおしゃべりできるコーナーも。

◆浪江のお客様がくつろげる場所を  
伸一さん 埼玉に1年間避難した後、郡山市に移ってきました。埼玉にいた頃から浪江の常連さんが訪ねてきてくれて、本当にありがたかったですね。こちらに来てからも、県内外から時間をかけて多くのお客様にお越しただいております。

美都女さん 浪江の店には赤ちゃんからお年寄りまで来てくれたから、みんな家族みたいだったね。

伸一さん 皆さん、うちにいらしているいろんな話を聞いています。百人百様の悩みを背負っているの、安心して話ができる場所でありたいですね。

孝子さん 私達を信頼して下さっているの、心を開いて話をしたいと思っています。

伸一さん それで、浪江の人がおしゃべりをして心からくつろげるヘアサロンを再開しようと思いたったのです。正直、この年齢になって、なじみのない土地で再開するのは、勇気が必要でした。でも、何の挑戦も無いで、このまま人生が終わっていいの、後悔したくないと思っただけです。

◆家族の思いを一つに再出発  
孝子さん 昔のような気持ちになれるか不安もありましたが、いい場所に巡り会って、ここならば大丈夫と思ひ決意しました。

将伸さん 僕は、東京で理容師の修行をし、浪江に戻ってから1年で震災に遭いました。地元で生きていこうと歩み始めた矢先だったので、ショックは大きかったです。いつ何があるか分からないからこそ、これからは自分らしい生き方を探したいと

思っています。父親の決断を応援していますよ。父親と人生や仕事について議論をするようになったのも、震災以降ですかね(笑)。

美都女さん 仕事があつて、家族一緒なのが何より幸せだね。

◆お茶を飲んで話をしましょう  
孝子さん ていねいな仕事をし、ゆっくりおしゃべりができる癒しのヘアサロンです。

伸一さん 時間をかけて遠くからいらつしやるお客さんに喜んでもらえるように、お洒落なサロンを目指しました。お茶を飲みながらおしゃべりできるコーナーもつくっています。予約制にしましたので、まずはお電話を。一度足を運んでください。家族でお待ちしています。

hair salon mitome  
11月7日オープン

郡山市富久山町八山田字三宝垣31-24  
(洋服の青山八山田店・極楽湯郡山店近く)  
TEL 024 (954) 5160



福島県

## 山田 秀男さん(井手)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉

取材日：9月17日 「平成28年11月 広報なみえ掲載」

## 浪江への思いに揺れながら、新しい暮らしへ

前回は平成27年6月号に掲載された山田さん。体の不自由だった奥さんと共に避難をした話をさせていただきました。

今回は、いわき市に住む今の暮らしと将来への決断、そして忘れられない浪江への思いについて伺いました。



▲若い頃は手仕事が好きだった山田さん。刺繍で作った観音像の前で。

## ◆一人暮らし

いわき市のこの家に引っ越してから、家内が転倒して骨折し、長期入院をしました。その後も、専門的な介護が必要となり、今は施設に入所しています。

それから一人暮らしになり、話し相手のいない生活をしています。家内が居ればケンカしながらでも会話ができたのですが

(笑)。

朝起きて午前中はずっと新聞を読んで、午後から運動不足にならないように散歩やダンベル体操をします。ひと風呂浴びて、晩酌をして就寝。一日が長

いのか短いのか、そんな日々の繰り返しですね。

なみえ絆いわき会（いわき市在住の浪江町民による自治組織）の定例会や、料理教室、体操のイベントには率先して参加しています。ここは浪江と違って近所づきあいもないので、親族以外の人と話をするのは、その時だけかもしれないですね。

## ◆浪江に帰りたかったが

東京で生活していた5年間を除いて、ずっと浪江の井手地区で暮らしました。世帯数約100戸の小さな地区で区長など役員をずっと続けてきたので、ほとんどが顔見知りでしたね。

井手地区は帰還困難区域になったので、家に戻るのはあきらめました。町内のどこかには住みたいと思っていました。

なぜ浪江に帰りたいのかと自問自答したけれど、自然が豊かだからとか、人づきあいがあるからというだけでなくて、それら全部をひっくるめた「空気」のようなものが他の町とは違うんですね。

しかし、いろいろ悩んだ末、

家内や関東に住む子ども、孫たちとのことを考えて、浪江には戻らない覚悟を決めました。

今、常磐線の駅の側に家を建てる準備をしています。家内がいる施設にも近いし、子どもや孫と会うにも、駅の近くの方が便利なので決断しました。

## ◆ずっと浪江とつながっていた

い

でも、浪江とはどこかにつながっていたと思います。住民票も移したくないんです。それは高速料金や税金の減免を受けられるからという理由ではありません。この間、運転免許の更新をしたら、住所に「浪江町井手」と書いてありました。これを見るとね、心底ほっとするんですよ。

みんながどこで、どんな暮らしをしているかを知りたくて、こころ通信を読むのが、今の楽しみです。浪江とつながっている実感が持てるので、いつまでも続けてほしいと願っています。



## 常盤 梨花さん(川添)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉  
取材日：9月20日 「平成28年12月 広報なみえ掲載」

### やりたいことで前向きに生きていきたい



▲浪江焼麺太国のパンフレットを手に。  
司会業では、女性司会者3人によるユニット  
「DREAM COLORS」を組んで活動中。

震災時は高校2年だった常盤さん。現在は、司会業とともに浪江焼麺太国の事務局スタッフとして地域おこしに携わっています。震災にとらわれずに自分の道を生きていきたいと明るく語ってくれました。

#### ◆進学・進路に悩んだ頃

震災後、母親の実家があった南相馬に避難し、その後会津、郡山を経て、今の本宮の家に転居しました。親は苦労したと思います。私は高校2年生だったので、受験勉強をしたり、進路に悩んだり、その時期に経験することを普通にやって過ごしていました。当時は声優に憧れていて、その道の専門学校に進むかどうか悩んでいましたが、結局会津の短大を選びました。在学中から、声優と同じように声を生かせる司会業の勉強を続

け、今は司会者として活動しています。友達同士でも、震災の話はあまりしません。友達とはバラバラになりましたが、それは震災が無くても、

進学、就職でそれぞれの道を行く時期だったからと思っっています。それに私たちは、中学校から携帯で連絡をとりあっていた世代なので、会わなくても寂しさを感じないのかもしれない(笑)。

#### ◆若い人たちの活動を支えたい

浪江に愛着を感じていますが、単に生まれ育ったからではありません。震災前に、浪江町をPRするためご当地アイドルを立ち上げようという浪江焼麺太国の企画がありました。私も声をかけられ女子高生プロデューサーとして、振り付けや作詞、イベントの手伝いをしました。そういう経験もあって、町が元気になるように何かしたいという気持ち芽生えたのだと思います。現在も浪江焼麺太国の事務局スタッフとして、イベントの司会や事務サポートをしています。同じ世代の人たちが響きあって何かができればうれしいですね。若い人たちの活動を支える存在でいたいと思っています。

#### ◆辛くなるほど頑張らない

私自身は、震災で自分の人生が変わったとは思っていません。震災がなくとも、きっと同じ道を選んでいったと思います。だから、「震災さえなければ」と思ったり、逆に「震災を乗り越えて頑張りましたよ」というのも、何か違うような気がしています。あくまでも自分のために、自分の生きやすいようにした方がいい。辛くなるほど頑張る必要はないんじゃないかと。昔、不登校だった時代もあったので、余計にそう思うのかもしれませんが、とにかく、震災にとらわれることなく、前向きに生きていきたいですね。自分のやりたいことで生活できたら素晴らしいと思います。それは、私にとっては司会の仕事です。いろいろな経験を重ねて、司会の価値を高めていきたいですね。



福島県

## 浪江中学校3年 松本穂乃香さん(田尻)

中・高・大学生に「浪江のころ通信」の原稿を募集したところ、浪江中3年 松本さんから応募がありました。  
浪江中の魅力と今の気持ちを伝える原稿をご紹介します。

〔平成28年12月 広報なみえ掲載〕



**ふるさとを離れている私たちだからこそ  
わかりあえることがある。  
浪江中学校に通えてよかった。**



▲浪江中の生徒の皆さんが、ストーリーから全て作成した紙芝居「浪江中学校成長物語」と一緒に。

「行くなら、浪江の…せめて福島  
島の学校がいい！」  
はつきりと言いつつ自分  
に驚いた。両親は私の意見を尊重  
してくれ、神奈川から福島へ戻  
ることになった。そこから、ま  
た体育館、旅館を経て、今は仮

東日本大震災そして原発事故  
に伴う避難：あの日から一度も  
浪江町には帰っていない。  
あの日から私は、津島、川俣  
と避難所を転々とし、しばらく  
して神奈川の親戚の家に落ち着  
いた。私が学校へ通う時期となっ  
たとき、  
「神奈川の学校に通うか。」  
と父に聞かれた。私はとっさに  
返した。

設住宅で生活している。なんと  
学校は念願の浪江中に通うこと  
ができています。避難している学  
校より普通の学校に通った方が  
いいんじゃない？と言う人もい  
た。だけど私は、浪江中に通っ  
てとても良かったと思っ  
て。なぜだろう？そう考えてみると、  
浪江中に何らかの魅力があるか  
らかなと思う。  
実は小学校は二本松の学校に  
通った。その学校はとても良い  
所で、仲良しの友だちもできた。  
だけど私はその友だちと別れて、  
浪江中に入学することを選んだ。  
そのときに一番強かったのは「浪  
江が好き」という気持ちだ。今  
思うと、神奈川でとっさに出た  
言葉も「浪江が好き」という気  
持ちからだっただけだと思っ  
た。  
自分で決めた浪江中への入学。  
そのときの入学生は8人。あれ  
から私は中学3年生になった。  
仲間が10人に増えた。そこで気  
づいた浪江中の魅力を紹介した  
い。まず、生徒数は少ないけれ  
どクラスの絆はこの学校より  
も深いと胸を張って言える。全  
校生は一つの家族みたいでアツ  
トホームな雰囲気がある。何よ  
り全生徒の「ふるさと」が一緒  
だということ。授業も全校生で  
浪江町のことを考えたり、震災

当時を思い出して話し合ったり  
することも。全校道徳で自  
分の避難中の出来事を話し合っ  
たときも、今もふるさとを離れ  
ている私たちだからこそ、分か  
りあえるんだなと感じた瞬間が  
たくさんあった。これは、ここ  
浪江中だからこそその授業だと思  
う。こんなことに気づくときも、  
私が浪江中に通えて良かったと思  
う瞬間だ。  
私は浪江中が好きだ。毎日  
が楽しく過ごせて、今がとても  
幸せだ。こんな幸せな日々が送  
れているのは、震災のあの日か  
ら継続していただいているたく  
さんの支援、元気づけてくれた  
人々、避難所として受け入れて  
くれた自治体、あのとき福島に  
戻ることを決断してくれた家族、  
浪江中の先生や仲間たち、本当  
にたくさんの方々のおかげだと  
思っている。私はたくさんさん  
の「ありがとう」を送りたい。  
これからもたくさんさんの困難が  
あると思う。でも、私には支え  
てくれている人がいる、浪江の  
仲間がいると思うと、どんな困  
難も負けずに乗り越えていける  
と私は思う。いつまでも「あり  
がとう」の気持ちを忘れずに一  
生懸命生きていきたい。

## 「那須避難者の会」 (愛称：那須やまなみの会)

会長 江川 等さん(樋渡)・江川 アイさん(樋渡)  
山本 芳子さん(北幾世橋)・菅野 幸夫さん(両竹)



栃木県

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉  
取材日：10月5日 「平成28年12月 広報なみえ掲載」

### 小さなお節介が人をつなぐ



▲左から 菅野幸夫さん、山本芳子さん、江川アイさん、江川等さん。後ろの暖簾は、アイさんによる染の作品。

那須地域に住む福島県からの避難者の交流を企画・運営する組織「那須避難者の会」は、昨年9月に発足しました。

会長の江川等さんと草木染作家のアイさんご夫妻、那須塩原市内にレストランを構えた菅野幸夫さん、那須町に住む山本芳子さんが集まり、浪江からの避難の経緯、今の暮らしと、会の活動について語り合いました。

#### ◆浪江から那須までの日々 山本さん

住まいは北幾世橋で、海や山、川も近くにあり、とても良い所でした。畑仕事が好きで、野菜を作っていましたね。震災の日は、私と夫、母の3人で着の身着のまま津島へ逃れ、そこから東和町の体育館に避難しました。そして姉の住む千葉県流山市に移り、借上住宅に住みました。3年間で4か所転居しましたね。

流山市でも畑を借りて野菜を育て、知り合いや近所に配っていました。そこから交流が生まれ、こちらに移住しました。

#### 菅野さん

短時間では語りつくせないほどの経験をしました。うちは、海に近い両竹地区で食品・雑貨を商っていた「菅野商店」です。私は消防団部長だったので、地震後すぐに出動しました。請戸小学校の様子を見に行き、児童が避難したことを確認して、校舎の外に出ました。するとゴォーツという音がして、白波が立った黒い壁のような津波が押し寄せてきました。消防車を猛スピードで走らせ、田んぼのあぜ道をつ切り、大平山まで逃げました。山裾では、流されてきた人を引き上げて救出

しました。夜を徹して消防団活動を行い、翌朝8時には残された人の救出作業を予定していましたが、原発事故で果たすことはできませんでした。

家族と荏野小学校や川俣町の福田小学校に避難し、そこから双葉町の人たちと一緒に、バスでさいたまスーパーアリーナに行きました。その後、さいたま市大宮区の借上アパートに移り、姉夫婦の紹介で那須塩原に転居しました。

#### 江川等さん

サイクリングが趣味で、震災の日も請戸の海へ行く予定でした。でも、虫の知らせか、行きたくないなあと思っただんです。もし行っていたら、命がなかったかもしれません。

#### 江川アイさん

「津波、逃げよ」の町防災放送を聞いて、夫と二人で中央公民館に避難しました。それが10箇所に及ぶ避難生活の始まりでしたね。公民館では水・食料の確保や、ラジオ情報を町職員に伝える等のお手伝いをしました。翌朝、原発事故の情報を聞き、津島活性化センターに行きました。7時間余りで「福島方面に逃げる」ということになり、川俣南小学校体育館に移動しました。3月15日早朝には、渋滞の中15時間かけて、千葉県



▲那須避難者の会による「お茶会」の集合写真。

船橋市へ行きました。その後、川崎市、品川区にある娘や姉の家に滞在し、4月になってやっと役場と連絡がつき、役場のあった二本松市東和文化センターに行きました。役場から草木染ができる裏磐梯のペンションを紹介してもらい、そこに4か月滞在した後、川崎市の国家公務員住宅に移りました。那須塩原市には25年の7月に来ましたね。

◆那須での暮らし

**山本さん** 私は、流山市でも那須町でも、すぐに仕事を見つけ

て働くようにしました。じつとこもっているのがイヤなんです。地域の人も話をしたいので、ご近所付き合いのほか、旅行やイベントにも積極的に参加しています。夫は、福島に帰りたいようですが、私はここでも暮らしていけるなと思ってます(笑)。

**菅野さん**

私が苦勞したのは仕事です。ずっと自営業だったので、人に使われるのが苦手なため、職場になじめませんでした。それで、調理師の免許と経験を生かして、自分で店を持つことにしました。27年には、「Papasong 888」というレストランをオープンしています。

**江川アイさん**

私は、草木染で、被災者交流の場をつくったり、体験教室を開いてきました。他県の染仲間の支援で裏磐梯、川崎市、白河市で展示会を行ったほか、28年5月には「3・11フクシマを忘れないで！」の思いを込めた草木染作品展を那須塩原市で開催しました。福島県、神奈川県、千葉県、栃木県内等から多くの方々に来ていただき、交流を深めました。「海よ」「分断の線」「無念と怒り」「生きる」「非情のフェンス」等と

題し、心情や情景を草木染で表現しました。動けばいろいろな出会いがあつて、助けていただけますね。

**江川等さん**

ここに来てから公民館の集まりに誘ってもらったり、近所の方に大変親切にしてくださいました。私も地域の役に立ちたいと思い、小学校の通学見守隊に入つて活動しています。

◆那須避難者の会の活動

**江川等さん**

いつしか那須に住む避難者同士の仲間もできました。そのつながりを生かして交流組織「那須避難者の会」を立ち上げました。那須塩原市周辺に、福島県からの避難者約100世帯が住んでいますので、互いに支え合えるつながりができると思います。8人の役員で話し合つてイベントの企画をし、活動を進めています。28年の春にはマイクロボスで下野市に行き、県内の避難者と交流しました。4月には「花見会」を開催し、11月にはいわきへのバスツアーや、年明けには新年会も予定しています。イベントの情報には「おたより」というチラシにして、市の協力を得て避難者宅に配布しています。

**江川アイさん**

会の愛称を、「那須やまなみの会」としました。那須連山と阿武隈の山並み、そして請戸の波を重ね合わせて命名しました。

**山本さん**

日にちが経つにつれ、それぞれの事情が違つてきて、避難者同士でも話がしにくくなつていくかもしれませんね。5年前の話はできるのに、共通の話題がないと今の生活の話ができない。同じ価値観の人でないと、関係が深まらないということもありますね。

**菅野さん**

失つたものを思い出してもしょうがない。新しいものをつくるしかありません。前向きに、胸張つて生きていきたいです。

**江川アイさん**

そうですね。それと、どこに暮らすにしても、人同士の小さなお節介が大切だと思います。私も、皆さんのお節介のおかげで、ここまでできました。

**菅野さん**

お節介が人のつながりをつくるんですね。

**江川等さん**

会として大きな方針があるわけではなく、少しずつ自分たちができることでやっていければ良いと思います。皆で呼びかけて独りぼつちの人を無くしていきたいですね。



浪江大吉SSB

松崎 智恵さん(権現堂)・平田 春美さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：10月2日 「平成28年12月 広報なみえ掲載」

## チームのメンバーが楽しんでプレーできるよう サポートしています！ メンバーは家族のような大切な存在です



▲メンバーの集合写真 2列目右から2人目が平田春美さん  
2列目右から3人目が松崎智恵さん

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」の皆さんが、今年も高畠町総合体育大会ソフトボール種目に参加しました。今年で6回目の参加です。試合後に行われる芋煮会にも参加し、高畠町の皆さんとの交流も楽しめました。今年は参加9名と試合できるぎりぎりの人数での参戦でしたが、例年と変わらない元気なプレーを見せてくれました！

今回は、松崎智恵さんと平田春美さんにお話をお聞きしました。お二人はチームのマネージャーとしてメンバーの皆さんを見守り、サポートや応援をしています。

### ◆今の暮らし

#### 松崎さん

今仙台に暮らしています。私も夫も学生の時仙台にいて知っている所でしたし、震災当時、私の両親が山形県高畠町、夫の両親が二本松市にいてそこから高速で行きやすいので、仙台に移ったという感じです。

#### 平田さん

震災当時は会津坂下町に一時避難し、そこから群馬県に移りました。夫は福島県に帰郷したい思いがあり、相馬市に移り住みました。現在は館林市と相馬市を行き来しています。震災前は夫と私の両親とも浪江町に暮らしていたので、家族が離れていると寂しくつらいことがあります。

#### 松崎さん

友達や両親が今までとても近場だったので、なかなか会えないというのがつらいです。でも徐々に仙台でも新しい友人もできてきて、だいぶ慣れてきました。

#### 平田さん

震災後、お墓参りの時期は、夫の両親と家族揃って浪江に行っています。夫の両親は仙台に避難しているので、合流して一緒にお墓参りをするようになりました。

#### 松崎さん

うちも震災を機に家族皆で出掛ける機会が多くなり

ました。夫の両親と震災前は5分10分の距離に暮らしていたので、離れたからこそつながりがより深くなった部分があるかもしれません。

### ◆チームのこと

#### 松崎さん

今年の高畠町大会は参加人数が少ないですが、それもチームの皆が現実なんだん戻ってきており、仕事も普通になってきているからだと思えます。昨年までは仕事が本格的に始動していないこともあり集まりやすかったです。今はメンバーも年齢的に責任ある立場になり休みを取りづらかったり、仕事も忙しくなったり徐々に常に戻ってきてつつあるのかなと感じています。

#### 平田さん

浪江に暮らしていた頃は、ナイターで練習試合をし、その後飲みに行っていました。震災直後からメンバーとは頻りに連絡を取り合い飲みにいき、近況などを話しています。

### ◆チームへの思い

#### 松崎さん

結果よりも個々それぞれが楽しんでもらえればいいなと思っています。年齢もばらばらなので、色々な年代から刺



▲「浪江大吉SSB」のヘルメット



▲試合中スコアをつける平田さんと松崎さん

激を受けて私たちも楽しいです。今日のメンバーは一番若い子で25歳。今日も朝一で茨城から駆けつけてくれたメンバーもいます。  
**平田さん** もう皆家族みたいな感じですね。年代がばらばらで

もすごく楽しく和気あいあいとプレーできるのが、大切じゃないですかね。

**松崎さん** そうですね。楽しい。年代が違うからこそ相談し合えたり、年が離れてるからこそ言いやすかったり。

**平田さん** メンバーの奥さんや彼女さんが集まる「SSBガールズ」があり、去年は休みがたまたま合ったので、高畠町に集まり、皆で応援やサポートしました。

**松崎さん** そうなんです。私も最初は応援だけでした。私たちが、結果が知りたくなり、自分で勉強してスコアをつけられるようになりました。今は平田さんに引き継いでもらっています。

◆高畠町への感謝

**松崎さん** 大会終了後、高畠町の皆さんと一緒に芋煮も食べさせていだいて感謝しています。福島は味噌で豚ですが、山形の醤油の甘い味も大好きになりました。また来年も楽しみにしています。実は今回、高畠町長さんが経営している旅館にたまたま宿泊させていただきました。旅館の方を通してこれま

での御礼をお伝えできたこともよかったですと思います。

◆これからのこと

**松崎さん** 最近は少しずつではあるんですが、私の友人なども今後の生活に向けて動いています。距離は離れているんですが、時間を作って会ったり話したりしています。今は震災の時の話より、今後こういふふうにしていこうと思うなどの先の話、明

る話をすることが多くなりましたね。

**平田さん** ずっといると思っていた故郷に今いられないっていう状況がつかうと思うことがあります。思い出がつかった浪江町なので一日も早く復興してもらうことを願っています。故郷を出てみると、故郷をより一層大切に感じますね。いつか浪江町で友人知人と再会できる日を心待ちにしています。

高畠町の皆さんから  
メッセージをいただきました

●高畠町ソフトボール協会 会長 菅野康雄さん

毎年1年に1回来てもらうこと、楽しみにしています。浪江の方たちも楽しみにしてくれているようですが、こちら浪江の皆さんが来るととても明るくなります。浪江の皆さんはとにかく元気がありますね！

大会終了後の芋煮会にも去年一昨年と参加してもらい、今年で3回目です。去年から浪江町のソフトボール協会からも大会の招待を受けていますが、今年は日程が合わず残念ながら参加できなかったのが、計画を立ててぜひ参加したいと思っています。

●やきとり大吉高畠店 店長 伊藤健彦さん

今回は参加人数が少し少ないですが、皆さん生活も落ち着いてきたのかなと感じ、良い事だと思っています。毎年いらしてくださる方や5年連続でいらしてくれている方など、皆さんと集まれる場所なので、年に1回お会いできることを楽しみにしています。休みを取れなくなったということは、それぞれの場所で通常の生活に戻ってきているのではないのでしょうか。今回見えない顔もあったので、来年はぜひいらしてくださることを楽しみにしています！



## 岡田 誠さん(高瀬)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：11月3日 「平成29年1月 広報なみえ掲載」

### 浪江の町の思い出は？ 「いろんなものが結構揃っていて、 便利で住み易く、楽しい町でしたよ」

冬でも暖かないわき市に越されてから、まもなく1年。  
誠さんは今年4月に発足した全日本歌謡研究会福島地区の副理事長を務めておられます。カラオケの盛んないわきで、趣味を通じて新たな繋がりが生まれていらっしゃるようです。また、奥様のトミエさんは、東京に避難していた際に習った日本舞踊を今も続けておられ、いわきに移られた後も活発に活動されています。



▲岡田誠さん、トミエさんご夫妻

◆あの日、あの時、どうされていたか

浪江町のシンボルと言われた「サンプラザ」で、食料品のスーパー「サンフーズ」を営んでいました。私は外出中で、店に戻る直前に地震が発生しました。お客さまも従業員も店内はパニック状態でした。当日は、家族や家のことが心配だろうと思い、従業員全員を直ぐに帰宅させました。帰宅途中に津波に巻き込まれ、1人亡くなってしまうことが、とても残念です。

翌日、お客さまはもちろん、役場からも物資の問い合わせが多数あり、小高店の店頭でテントを張り、幹部総出で販売をしました。母が福島医大に入院していて、数日前に手術を終え、妻はたまたま地震の前日、身の回りの物を取りに浪江の家に帰宅してしまっ

た。翌日、私は早朝から店に行き家に戻れなかったため、午後2時過ぎに妻は避難のために津島へ向おうとしたが、連なった車の列に入れずに、相馬市に住む妹を頼り、私も夕方、そこに合流しました。

相馬に2晩お世話になった後、母のことが心配で医大に向かいましたが、院内に入ることができませんでした。スクリーニング検査の嚴重な確認はもちろん、家族や親戚の安否などを書いた直筆のメモさえ渡せず、職員の方が書き写したメモを母に届けてもらいました。その後も三春の私の実家に世話になりながら足を運んだのですが、とうとう面会は叶いませんでした。電話も繋がらず、さぞ不安な日々を過ごしたのではないかと思います。

その後、千葉県津田沼にいる長男のところを経て、東京都江東区の東雲住宅に入居しました。母を医大から東京の病院へ移し、暫くは通院していたのですが、再び7月に入院。8月に亡くなりました。東京に行く時に、「長年住み慣れた浪江の家を見たい」と言っていました。立入り禁止区域となっていたために、見ることもなく逝ったことが心残りです。

◆いわきの暮らしはどうですか。また、浪江に対する思いも聞かせてください

東京はとても便利で、東雲住宅の方々とも交流を育み、昨年12月



▲トミエさんのお父さまは庭の手入れがご趣味で、庭石の蒐集もなさっていたそうです。浪江から運ばれた庭石のひとつの前で、もうワンカット

まで過ぎました。私たちには3人の息子がおり、千葉と県内にそれぞれ暮らしています。子どもたちや孫が来てくれる家をと、郡山市やいわき市を見て回りました。そして、東京から通いながら3年越しで、この家を建てることになりました。

私たちが住んでいた家をどうするか、今もなかなか踏み切りがつきませんが、町の復興の道筋が見えてくると、判断も楽になるかもしれませんね。

いわきの同じ住宅地内には、偶然にも大変親しくしていた地区の方がいらして、とても心強いです。近所の方々と触れ合いながら暮らしていきたいと思っています。

商売や商工会の活動でお世話になった浪江町への思いは終生変わることはありません。ですから、これからも何かで関わっていきたい、繋がりを失くしたくないと思っています。



福島県

## 今泉保奈美さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：10月22日 「平成29年1月 広報なみえ掲載」

### 浪江のまちづくりに関わるのが夢です



▲ご自宅の玄関先で、バットの構えを見せてくれる保奈美さん

今泉保奈美さんは現在、大学1年生。

葛尾村を経て福島市内で避難生活を送り、現在は飯坂町に新築したご自宅でご家族とともに元気に暮らしています。

小学校時代から続けている野球に夢中。大学で学んでいる土木建築の知識を生かし、「将来は浪江のまちづくりに役立てたら」と力強い言葉を聞かせてくれました。

#### ◆今、夢中になつていふこと

野球です。福島県内で唯一の女子硬式野球チーム、郡山市の「福島ヴィーナスベースボールクラブ」に所属しています。中学生から社会人まで年齢を問わず、多世代の人と交流できるのも楽しいです。ポジションはセカンドですが、人数が少ないので内野も外野もできるようなしっておいてねと言われています。自分としては守りより打つほうが楽しいですね。

毎週土日が練習日。郡山まで電車を通うのは結構大変です、練習場も毎回変わるの、母の車で送ってもらうこともあります。また関東リーグに入っているの、大会が開かれる日は朝5時頃、父たちが運転するワゴン車にみんなで乗り合って関東

圏に出発し、夜10時くらいに帰ってきます。親にも負担をかけていますが、「応援するのが楽しい。張り合いがある」と言ってくれるのがありがたいです。今秋のシーズン中で一番思い出深いのは、ヤングという男子チームが主催する大会に呼んでいただいた、新潟の男子チームに勝ったこと。最後に自分が打って点が入った時には本当に嬉しかったです。

#### ◆野球・ソフトが支えに

野球を始めたのは浪江で暮らしていた小4の時です。スポーツ少年団に入団して基礎を叩き込まれ、浪江中ではソフトボール部に入りました。

中1の時に震災が起き、中2の春から避難先の福島市・西信中学校に転校しました。すぐにまた転校することになるかもしれないなかつたので迷いましたが、監督に背中を押していただき、ソフトボール部に混ぜてもらって。メンバーが温かく迎えてくれたのですぐに溶け込めました。転校してから学校を休んだことは1日もなく、母は「ソフトをやっているのがよかった」といって。私が元気に学校に通っているのが、家族にとっても大きな張り合いだったようです。

#### ◆将来の夢、故郷への思い

大学では土木系の勉強をしています。祖父が木工で、今、住んでいる家も祖父が建ててくれたんです。私も子どもの頃から大工仕事が好きで、デザイン・設計よりも体を動かして物づくりをするほうが性に合っている。それで土木系を選びました。

将来的には大学での学びを活かして、浪江のまちづくりに関わるのが夢です。実現できるかわからないけれど、例えば道路をきれいにするとか、復興に少しでも貢献できたらいいなと思います。

浪江には、15歳になってから年に10回くらい通っています。家はもう住めない状態なので解体が決まっていますが、いつか祖父と力を合わせて新築したい。西信中の友だちとは今もよく一緒に遊んだりしていますが、浪江中の仲間と集まる機会はなかなかなくて。だから成人式でみんなに会えるのをとても楽しみにしています。復興が進み、浪江の体育館で再会することができたら最高ですね。



静岡県

## 堀川 文夫さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：11月4日 「平成29年1月 広報なみえ掲載」

浪江で長年積み重ねた経験と信頼。  
新たな土地でそれを取り戻すことはもうできない。  
自分が今できることを、毎日精一杯取り組むだけです。

堀川さんご夫妻は、震災後避難した静岡県富士市で学習塾を営まれている。塾生へのかかわり方、趣味の社交ダンスや釣りなど、表向きは浪江の時と変わらぬ仕事ぶりや活動ではあっても、思ったようにはならないもどかしさや苦悩が見える。

しかし4年半ぶりの再取材だったが、まちの復興や教育に対する堀川さんの熱い思いは以前のように力強く伝わってきた。



▲左から妻の貴子さんと文夫さん。学習塾を兼ねた自宅前で。

震災直後、富士市に避難して最初の10か月間過ごした住まいから、現在のところに移り住んで4年以上が経過しました。ここは持ち家ですが、今もなお「避難中」であるという感覚は変わりません。落ち着かない気持ちです。でも先のことを描いてもどうにもならないので、まずは5年先のことを考えようと思進したつもりでしたが、もうその5年が経ってしまいますね。また次の5年を考えなければな

りません。安心して落ち着ける時間は本当にいつ来るのでしょうか。

ここにきてから浪江のときのように学習塾を始めました。ようやく20名ほどの塾生が通ってくれるようになりました。震災当時、浪江で塾生だった教え子たちとは毎年交流があります。先日は、こちらの塾生たちの林間学校の応援のために遠方から集まってくれました。心からうれしかったですね。最近、浪江での塾生たちとの思い出をビデオにまとめて妻とふり返っています。当時は60名を越える塾生がいました。浪江町で二十数年をかけて積み上げてきた経験や地域の皆さんとの信頼関係は、今となっては本当に尊いものです。土地が変われば、学校や親たちの考え方、子どもたちの教育環境もかなり違います。そして私たちの年齢のこともありませんから、浪江と同じだけのものを取り戻すことはもうできないと思っっています。それでも、浪江の頃と同じように趣味の社交ダンスや釣りを楽しみながら、今の自分にできることに取り組んでいます。

こちらでは震災や原発事故の教訓を伝える語り部としての活動も時折あります。本気で受け止めてもらうためには根気強さが必要ですが、何度でも子どもたちには伝えていくつもりです。最近の福島の記事などを見てみると、地震や津波、原発や放射能の危険性をきちんと子どもたちに伝えていくのかどうか疑問を感じるときがあります。あの震災の教訓をしっかりと次の世代に語り伝える責任が私たちにあり、強く思うのです。

いよいよ帰町の話が始まっていますね。私は、浪江町の復興が一つの方向だけを向いていた、一つの価値観に偏っていたりすることを危惧しています。私にも自分なりの考えはありますが、特に福島ではなかなかそのことを口にできない雰囲気があります。そのためか、ふり返ると身のほどに合った取り組みだけをしてきた自分にも気づきます。そんな自分もどかしいです。ただ、全国に散り散りになった町民の皆さんの思いが本当に多様なものであることはきちんと受け止めてほしいと願っています。



## 橘 光顕さん(幾世橘)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：12月1日 「平成29年2月 広報なみえ掲載」

### 自分のできることをやっていきたい



▲植樹した河津桜

高校まで浪江で暮らし、東京での演劇活動を経て、浪江に戻った橘さん。再スタートの道が開けた時に起きた震災。一時は歌うべき歌をなくしましたが、今は、上尾シラコバト団地で立ち上げた「東日本大震災に咲く会 ひまわり」の中心で活躍しています。

◆シンガーソングライターを浪江町から輩出したかった  
中学時代にギターを始め、友だちとバンドを組んでいました。高校までは浪江にいて、大学進学を機に東京で暮らし始め大学在学中から、演劇活動をやっていました。日比谷公会堂で主役を演じたこともありましたが、40歳の頃、体を壊して浪江に戻りました。高校時代には、浪江にも楽器を扱う店が3店舗ありましたが、40歳で戻った時には1店舗も残っていませんでした。これでは楽器を始めたくても始められない。ギターを始めると人の助けになりたい。シンガーソングライターを浪江町から輩出できればと思うようになりました。様々な仕事に就いてお金を貯め、震災の年の春には、弾き語りコース以外に作詞作曲コースを併設する予定でした。フローリングの床にして、物はほとんど置かず、音が響くようにしました。今後、浪江に帰

られるようになって、生徒は集まらないでしょうね。  
◆沢山の支援物資  
震災直後、避難指示を受けて津島に避難しましたが、避難所はいっぱい、川俣に行けと言われていました。川俣の避難所も入れる可能性は低いと思い、コンビニの駐車場で車中泊。葛尾村、福島市、会津坂下を経て、埼玉の友人宅にお世話になり、そこで県営住宅の募集を知りました。その友人が貸してくれたギターとバックひとつで入居しました。避難して来た当初、たまたまテレビの取材を受けた時に「部屋は決まったけれど、部屋には何もなし」と話したところ、沢山の家電製品が集まりました。シラコバト団地自治会や私の友人から寄付してもらった日用品も含め、すべて自治会倉庫に置かせてもらい、希望者の部屋まで運びました。  
◆「東日本大震災に咲く会 ひまわり」の立ち上げ  
岩手や宮城から避難して来た人たちも含めて多い時には、61世帯もの人たちがここで暮らしていました。震災から5年半を過ぎ、今は22世帯の人たちが暮らしています。避難して来てすぐの4月29日に、団地の自治会が歓迎会・激励会を開催してくれました。物が無い、情報がないといった状況の中で、ばらばらでは困りごとを解決できないと、その会に集まった避難者の15世帯で会を立ち上げました。毎年3月11日には、団地内で追悼式を執り行っています。河津



▲ギターを手に歌う橘さん

桜の植樹、ひまわりの旗(寄せ書き)の作成、護摩だき、タイムカプセル作成と毎年、記憶に残る事業を展開しています。  
◆自分ができることをやっていく  
震災後、半年くらいはギターを弾けませんでしたが。弾くべき曲がなくなってしまうからです。震災から半年たったころ、ギターが自分自身を呼んでいる様でした。9月には曲を書き始め、その後は湧き出るに任せ、今では90曲くらいになりました。演奏依頼があれば、出かけてオリジナル曲を披露しています。ここまでがんばれたのは、人の力だと思えます。「誰も助けてくれない」という声を聞くことがあるけれど、自分ができるところをやれば、周囲の人からの支えの手も出てきます。昨年から、団地の夏祭りの実行委員長も引き受けています。埼玉県は、県内に避難中の被災者用に入居条件を緩和して、シラコバト団地だけでも50戸の入居募集を1月に行います。転入して来た人たちが安心して暮らせるように、「ひまわり」の活動を続けて行きます。



## 中里 恵子さん(加倉)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤  
取材日：12月8日 「平成29年2月 広報なみえ掲載」

### 家族の助け合いを実感、 いつかは食堂を再開できたら！



▲自宅のリビングで

震災前は、川添北上ノ原地区で「みどり食堂」を営んでいた中里さん。焼きそば、カツ丼、うどんなどが人気メニューでした。震災後は、お客様達が年に1度開いてくれる交流会「みどり会」が楽しみだそうです。平成27年5月からは、栃木県那須塩原市に自宅を新築し住んでおられます。

◆震災後は那須町に避難  
震災後は、津島で2日間過ごした後は那須町に移動。友人や従業員、親族と9人で避難しました。昨年、那須塩原市に引越すまで、約5年半以上那須町を生活の拠点にしてきました。現在は、娘と孫と一緒に暮らしています。夫は7か月間の闘病生活を経て、平成25年5月に他界。孫が時折「おじいちゃんは優しくかったね」と思い出話をしてくれます。私の避難生活は、娘や親族が近くにいたり友人に恵まれたので、それほど苦労することはありませんでした。ただ、心残りなのは親戚や私の兄弟姉妹がバラバラになってしまったことです。浪江に住んでいた

頃は家が近く、よくお茶飲みなどで行き来をしていたので。最近、苧野の加倉地区老人会の女性部長をしたり、白河なみえ会の会合に参加したり、福祉大会や研修会に出席したりして、浪江の時の友人たちと話すのが楽しみです。

#### ◆忙しくも楽しかった食堂経営

私は子どものころからスポーツが大好きでした。バレーボールは地域で「苧野クラブ」というチームを結成して楽しめました。町の大会で優勝したこともあったんです。サンプラザにあった運動教室にも通って、そこで友人がたくさんできました。その時の運動仲間から震災後に手紙が来ることもあり、つながりの大切さを感じているところです。

震災前に約18年間経営していたのが「みどり食堂」です。この経営を始める時は、飲食店を営んでいる青田さんから、調理や経営のノウハウを学びました。その後、お店をオープン。約10日間くらいの短い研修期間でした(笑)。私は、料理を作ることはもちろんのこと、人と会うのも大好きでした。い

ろんな話をするのが楽しくて、儲けを考えずに経営していました(笑)。震災にあわなかったら、今でも食堂をやっていたと思います。店に来てくださった方のお顔が懐かしく想い出されます。

#### ◆避難指示解除後の想い

浪江町苧野にある自宅はハクビシンなどの動物たちに荒らされ、住める状態ではありません。ですが、娘の家が浪江にあり、そこは住めそうなので浪江に向いたとき借りて泊まれたら、と思っています。避難指示解除後は、様々な会合が浪江で開催されることになるでしょう。その時は、浪江に向き合いに出席し、友人知人と会っていろんな話がしたいですね。

食堂という仕事が無くなり、十分な時間ができた今、なるべく体を動かして寝込まないように過ごしています。でも、私の気持ちの中では「食堂を再開できたら」という想いがあります。「応援するよ!」と言ってくださる方もいます。再開の夢を持ちながら、これからも家族で協力し合って、自分のできることをやっていきたいと思っています。



福島県

## 大平 美保さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：12月24日 「平成29年2月 広報なみえ掲載」

### 子どもには、いつか、 ママが育ったまちを見せたい



▲美保さんと莉愛ちゃん。親子で素敵な笑顔、ありがとうございました。

震災の年の12月に結婚され、今はいわき市内郷の宮沢団地で、ご主人と2歳になる娘の莉愛ちゃんと3人で暮らしていらっしゃいます。

陽の光がいっぱいに入るリビングや和室で、莉愛ちゃんは楽しそうに遊んでいました。これからの健やかな成長を心から願わずにはられません。

◆避難中のさまざまな情報は、もっぱら彼や友人知人との携帯でした

震災の時、私は21歳で、浪江町役場近くの「みよし浪江店」に勤めており、あの時刻にはお客さまもいなく、遅い昼食を摂っていました。その時、6号線傍の消防署から避難のアナウンスが流れ、実家に戻りましたが、外側は然程でもないのに、家の中は足の踏み場もないほど物が散乱していました。幸いにも水道も電気も止まらなかったのが起きたのかの状況を知ることができ、両親と弟、家族4人で相談し「ちよつとでも浪江から離れよう」と、その日の夕方には原町まで避難することになりました。

翌日明け方に一旦家に戻りましたが、中には入らずに、車にいました。サイレンと共に津島への避難を呼びかけていた防災無線の放送を聞き、荷物も持たずに小学校の体育館に行きました。そこには友だちがいて、とても嬉しかった

ことを覚えていきます。

「これも危ない」という別の友人からの情報で、福島市に向かいましたが、市役所だったと思うのですが、避難所になっていた小学校を教えてもらい、1週間ほど過ごしました。父は2日に1回透析をしていたので、受入先の病院を探さなくてはなりませんでしたが、そんな時もお互い助け合っていました。大きな力になってくれました。その後、三春町の父の実家にお世話になった後、岳温泉「東三番館」に約1か月いました。

弟は、避難中、ずっと面白いことを言って家族を元気づけたり、買い出しをしてくれたりしました。つくづく姉弟っていいな、心強いなど、本当に有り難かったですね。

◆この団地は、以前の住まいよりは一寸不便だけれど、気に入っています

夫とは以前から浪江といわきで離れていたこともあり、11月には私がいわきへ移り住むことにしました。結婚したのは12月でしたが、なかなか新居が見つからず、市内のアパートを一生懸命探し、ようやく住むことが出来ました。

その頃、両親と弟は本宮市の仮設住宅に入居しましたが、その1年後には、父が通っている谷病院にも、本宮駅にも近い場所に家を見つけて移りました。その後、弟は結婚し、今は二本松市に住んで、両親を見守ってくれています。うちの娘も含めて孫が3人になったので、両親にはとても励みになっていくようです。

私は、嫁いだ所がいわき市なので、借上げ住宅も復興公営住宅にも入れないと思っていました。でも、母が役場に確認してくれて、入居することができました。ここは私のように避難した人たちも多く住んでいるので、気を遣うこともなく、気持ちが良いです。

浪江町がどんどん復興していくことは嬉しいのですが、反面、悲しくもあります。浪江に道が出来るって聞いたので行ってみたいけれども、2歳の子どもを連れていく場所ではないように思います。また、母として私自身の身体に何かあったらという恐れもありますし、目に見えない怖さを感じます。

それでも、娘が高校生になる頃には、浪江の町を見せたいと思います。普通に行き来できるようになっていて欲しいですね。



## 横山和佳奈さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：1月10日 「平成29年3月 広報なみえ掲載」

### 大変な時に助けてもらったから、 今度は私の番だと思っています

横山さんご一家は、郡山市に住んでいらっしゃいます。平成25年7月号に掲載された父の浩志さんは、現在、南相馬市に単身赴任中。普段は母の恵美子さん、和佳奈さん、弟の知明君の3人で暮らしています。

震災当時、小学校6年生だった和佳奈さんは、まもなく大学生になります。

また、18歳選挙権が施行されてから初となる選挙、参議院選挙が行われた時には、新聞社の取材を受けて堂々ご自分の意見を伝えています。(平成28年7月10日県内紙掲載)

今回の取材では、浪江から郡山に避難した後の学校生活や、これからの目標などを中心にお聞きしました。



◆カウンセラーさんとの出会いが、将来の目標のきっかけに  
震災の起きた日は、請戸小学校(以下、請戸小)6年生の卒業式の日の直前でした。浪江東中学校への進学のために、制服も注文していましたが、請戸のお店で採寸しただけで一回も着ることなく、両親や弟と共に郡山市に来ました。  
家の近所の郡山市の大規模な中学校に転校したのですが、まず驚いたのが生徒数の多さでした。一学年180人って請戸小の全校生徒数より多くないか…って、なにしろ請戸小は100人弱でしたから。最初はなかなか慣れなかったのですが、クラスの出席番号が近い、私と同じ苗字の子がとてもよくしてくれて、徐々に打ち解けました。それから、2年に進級する時の「クラス替

▲センター試験直前のお忙しい時期にもかかわらず、取材を受けてくださいました。これからの和佳奈さんの人生が、幸多いことをお祈りします。

高校は、市内の私立高校の普通科に進みました。私立ということもあり、本当にいろいろな人たちがいました。避難をしたことは話題にもなりませんでしたが、浪江の幼稚園で一緒だった男子生徒がいて、卒業までには一声かけてみようと思っています。

え」も、請戸では考えられなかったもので、戸惑いましたね。でも、2年・3年の同級生とは、卒業したくないほど仲良くまりました。  
中学校には浜通りから3人の生徒がいました。担任の先生から、カウンセラーの先生と話してみなさいとアドバイスされ、戸惑いながらもカウンセラー室を訪ねました。それまでカウンセラーという職業も知りませんでした。何度か先生と話をしていくうちに、心理学にとっても興味を持ちました。同時に、私自身が自覚していなかったものの、避難や転校に対するストレスが蓄積されていたのでしよう。あのような機会がなければ、今頃は鬱々としていたかもしれません。  
浪江に対しては、町というより、生まれ育った請戸への思いが強いですが、昨年8月に行つた時、家があった場所は更地になり、請戸小も未だに入れないままでした。辺りの景色も変わり、どんどん知らないところになっていくような気がします。

◆大学進学と将来、そして選挙。おとなへの一歩を踏み出して  
推薦で、第一志望だった東北福祉大学総合福祉学部への入学が決まり、仙台で暮らすアパートも見つけました。将来は、今ならば熊本などの災害の現場で働くこと。あるいは学校でのカウンセリングの仕事を目指したいです。  
また、初めて訪れた選挙の投票所は、おごそかというか清冽な空気を感じ、とても印象的でした。両親に「選挙は行くべきもの」と幼い頃から言われて育ちましたが、選挙がより身近なものに思え、国会中継や街頭演説などを積極的に見聞きするようになりました。  
この年末に請戸小の仲間と久しぶりにグループ電話で話しました。当時、6年生の同窓会が久しぶりに実現できたらいなと思っています。



新潟県

## 木村江美子さん(川添)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：1月18日 「平成29年3月 広報なみえ掲載」

### 浪江の思い出が少なくなってしまうのが寂しい

現在、新潟県の県央地域に位置する燕市で、家族と愛犬と一緒に暮らしている木村江美子さん。今回、近所に住む娘さん家族との生活や浪江への思い出などをお話しいただきました。



▲新潟の冬では珍しい晴れ間の見えた日にお庭で

#### ◆今の家族のかたち

震災発生後、郡山や会津を経て、割と早い段階で新潟県内に避難してきました。

現在は、新潟県燕市で空き家をリフォームした一軒家に、私の両親と三男の息子と一緒に暮らしています。主人は建築関係の仕事のため福島の日通りに帰り、長男は千葉県で暮らしているため、家族それぞれ離ればなれの生活に。ですが娘夫婦が近

所に暮らしていて、中学生と小学生の孫たちがほぼ毎日家に寄ってくれるので、子どもたちから元気をもらっています。

また、この3月で2才になるチワワの「ココ」もいます。ココは、新潟に来てから飼い始めたのですが、実は福島生まれなんです。私たち家族との縁を感じますね。

最近では、こちらにいた同じ避難者の方や友人が市外または県外へ行ってしまい、そういった人たちとの交流が減ってしまったので、孤独感や不安感を感じることも多くなりました。この歳になると、新しいコミュニティに入りたり、そこで馴染んだりすることがなかなか難しいです。

#### ◆浪江への思い

浪江に住んでいたころは、リサイクル関係の自営業をやっていました。震災の影響で自宅は半壊だったのですが、借家だったため知らないうちに取り壊されていったんです。思い入れのある家や浪江の友人など、浪江の思い出がいつの間にか少なくなっていくのが本当に残念です。

私自身、浪江に戻りたい気持ちはあるのですが、実際にどうするかは決めかねています。今でも浪江のことをよく思い出しますが、孫たちは浪江での記憶がほとんどないので寂しいですね。孫たちが自立するまで5、6年あるので、その間に家族で話し合い決めていければと思っています。

## なみえ絆いわき会・ぐるりんこ隊

会長 **大波 大久**さん(川添)

ぐるりんこ隊 **田村 栄子**さん(北幾世橋)・**山田 美津**さん(牛渡)  
**山田比佐子**さん(大堀)・**松本 祐子**さん(川添)  
**齋藤美恵子**さん(川添)



福島県

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島  
取材日：12月22日 「平成29年3月 広報なみえ掲載」

## 苦しい避難生活を支え合った仲間是一生の宝物です！



▲「ぐるりんこ」の活動メンバー

左から 田村栄子さん、山田美津さん、山田比佐子さん、松本祐子さん、齋藤美恵子さん

いわき市に避難した浪江町民が立ち上げた「なみえ絆いわき会」。

震災後、孤立した状態で暮らしていた町民に必要な情報を届けたり交流イベントを開催したりと、大きな役割を果たしてきました。

中でもユニークなのが女性有志による訪問活動「ぐるりんこ」です。同会の大波会長と「ぐるりんこ」のメンバー5人にお話をうかがいました。

### ◆会を結成したいきさつ

**大波さん** いわきでは浪江町民向けの仮設住宅をつくっていただけなかつたので、誰がどこに住んでいるかもわからず、浪江の情報も入りにくい孤立した状況でした。震災の年の11月に、浪江町の健康診断の時にいわきに避難中の友人、知人の皆さまと顔を合わせたのがきっかけで「なみえ絆いわき会（以下、「絆会）」を設立したんです。当初は会員数80人ほどでスタートしましたが、今は家族も含め千人近くに上ります。

また家に閉じこもりがちな方も多かったので、訪問活動も必要だという声が自然に高まり、役場OBの奥さんなど女性たちにお住まいの地域周辺を回っていただく「ぐるりんこ」の活動が始まったんです。いわきは広いので7区域7班に分け、15人のメンバーが2人1組で各戸を訪問してくれています。

### ◆「ぐるりんこ」の結成当初

**田村さん** 震災直後は白河のほうに避難しましたが、息子の勤め先がいわきだったのでこちらにきました。浪江にいた時は忙

しく走り回っていたので何もしていないのが辛くなり、お役に立てることがないかと思っていたところに山田比佐子さんの旦那さんから「ぐるりんこ」に参加しませんかと声をかけていただいたんです。

**山田美津さん** 私は猪苗代に避難した後、アパートが見つかったのでいわきに。浪江の方とお話したかったですし、「ぐるりんこ」のメンバーは旦那さんが役場のOBで知らない仲ではなかったから、すぐに参加しました。

**山田比佐子さん** 私は仙台、裏磐梯に避難した後、娘夫婦の孫の世話をするためにいわきに来ました。「ぐるりんこ」に加わった理由は美津さんと一緒です。最初は一軒一軒、自分たちで地図を調べてお宅を探るのが大変でした。ね。自家用車で回りますが、土地勘がないし、表札を出していないお宅も多いから同じところを行ったり来たりしちゃったり。

**松本さん** そうそう。でも会いに行くのが喜んでくれて、感動してくださる方もいらつしやる。そのおかげで私も癒され、気持ち落ち着いていった気がします。私たち夫婦も息子たちと一緒にいわきに来たものの、知り合いも全然い wasn't でしたので。



▲「ぐるりんこ」の活動を振り返る、田村栄子さん(左)と山田美津さん(右)



▲いわき市にばらばらに避難した浪江町民のつなぎ役として尽力した「なみえ絆いわき会」会長の大波大久さん



▲左から 山田比佐子さん、松本祐子さん、齋藤美恵子さん

### 齋藤さん

浪江ではお付き合いのなかった方をお訪ねするわけですが、浪江っていうだけでお互い気持ちが悪く通じるんですよ。浪江では苧野に住んでいたんだよって聞くと、苧野に行ったことがなくても懐かしい気がする。あちらもそう思ってくださいるのが嬉しいです。

### ◆活動の成果、気持ちの変化

### 田村さん

初めの頃は、避難していることを近所の方に隠してひっそり暮らしている方もいましたね。「ぐるりんこ」はお揃いのユニフォームを着て訪問するんですが、「隣近所に見られると嫌だから脱いで」と言われ、心が折れそうになったこともありました。でも時間が経つにつれて皆さん明るくなりましたね。浪江の人とのつながりができたと、今は家を建てて落ち着かれた方も多かったです。

### 山田美津さん

ただ高齢の方はやはりお寂しい気持ちも抱えているのでしょね。浪江のことを話し出すと次から次に話が出て止まらなくなり、おいとましくくなることもあります。

### 山田比佐子さん

通常は玄関先で「なみえ交流館」で開かれる

催しのご案内をお渡しし、20分くらいで帰るんですが、長い時は1時間くらいお話しします。長くなりそうなお宅は最後に回ったりしますね。

### 松本さん・齋藤さん

「なみえ交流館」では「絆会」の主催で新春餅つき大会、芋煮会といった交流会を年4回くらい開いているんです。他にも支援員の方がクラフト・ガーデニング・カラオケ教室などいろんな交流の機会をつくってくれているので、60代くらいまでの方はわりあい積極的に参加して楽しんでいらつしやる。でも80代以上の方は、車の運転ができなくて足の便がないといった事情もあり、家に閉じこもりがちなんです。そういう方のお話し相手になり、少しでも元気になっていただけたのは嬉しいことです。

### ◆現在の心境、今後のこと

### 田村さん

浪江にいた時は、町の人みんなが集まって何かをするという機会はありませんでした。そもそも「ぐるりんこ」のメンバーだって交流がなかったわけですね。いわきに来てこんなに仲良くしていただいたのは本当にありがたいご縁で、一生の

財産だと思えます。4月以降、「絆会」の活動をどのように継続するかはまだ決まっておらず、役員の方が検討中なんですけどね。

### 山田美津さん

気持ちとしては訪問活動を続けたいけれど、私たちも年を重ねていきますし、人を乗せて車を運転する以上、事故に遭ったらどうしようという心配もある。低料金でバスかタクシーが使える制度がいわきにもできるといいなと思います。

### 山田比佐子さん

帰町をめぐって迷っている方も多いと思いますが、うちは帰還困難区域なのでまだまだ先が見えないんです。前だけ見て生きていくしかないと思っています。

### 齋藤さん

帰町する方しない方、それぞれの立場や気持ちを尊重しなくちゃいけませんよね。そして田村さんもおっしゃった通り、苦しい避難生活を支えてくださった「ぐるりんこ」の皆さんには本当に感謝しています。

### 松本さん

同感です。避難してこんないい方たちに出会った一悪い事ばかりじゃなかったですね(笑)。

